

始



特263

46

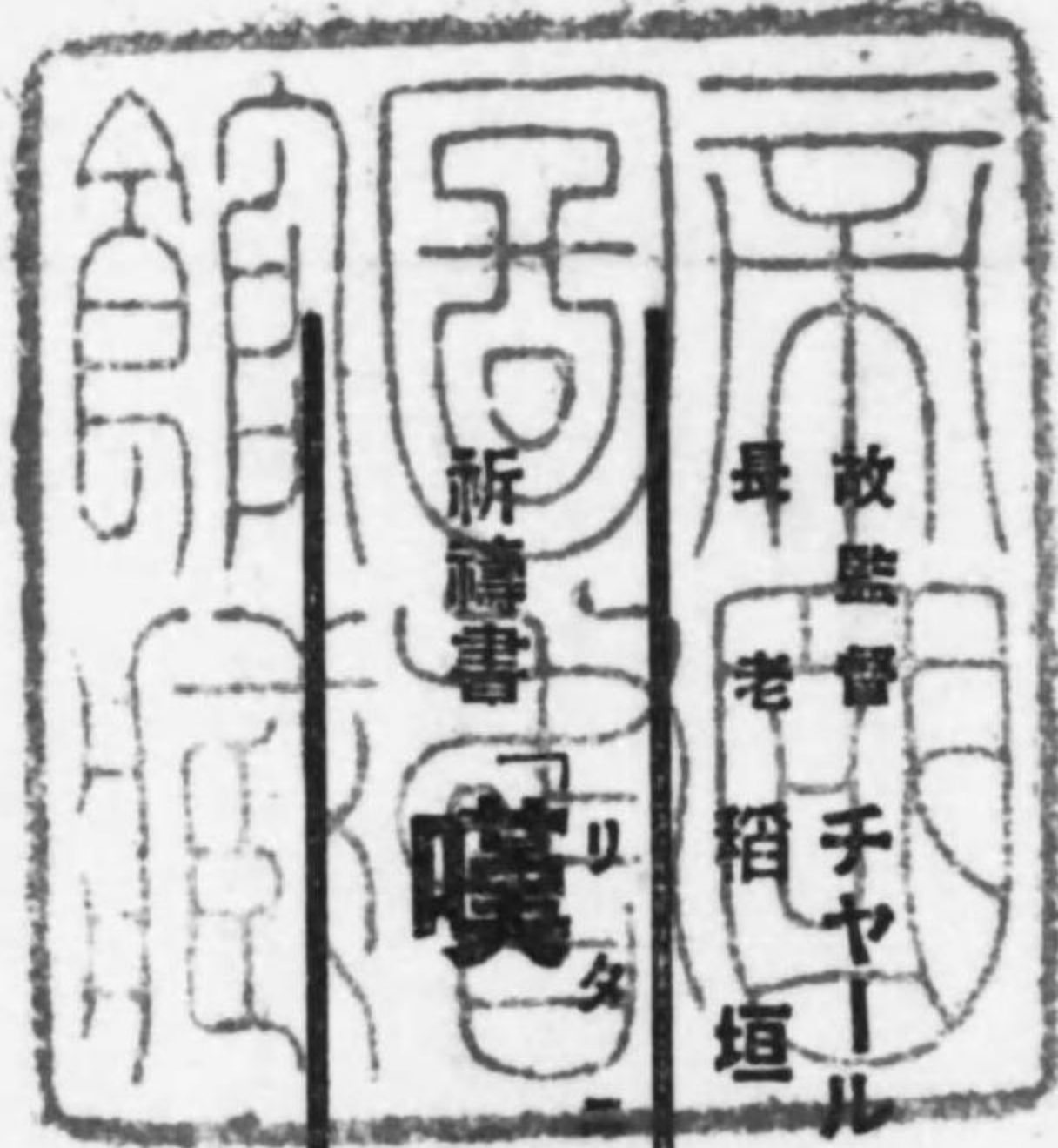
祈禱書
「嘆願」
靜想

故監督 チャールズ・ゴア博士絶筆
長老 稻垣陽一郎 譯



第二輯
1934

特263
46



故監督 于ヤールス、ゴア博士絶筆
長老 稻垣 陽一郎 譯

願
静
想



神の偉大なる忠僕たりし
 故監督チャールズ、ゴア博士の
 記念に其絶筆に成れる
 本書を翻譯刊行す

白石庵敬神叢書

- 一、本叢書は財團法人白石庵敬神會の助成金によりて發行せらる。
- 二、本叢書は我國に於ける基督智識増進の爲めと信徒の建徳上機分にも貢獻せんことを期す
- 三、本叢書は一年三回發行す。
- 四、本叢書は稻垣陽一郎監修す。
- 五、本叢書は
 - (一) 聖公會の教義に関するもの
 - (二) 敬神修行に関するもの
 - (三) 傳道に関するもの
 - (四) 基督敎藝文に関するもの
 等を載す。

はしがき

「英國教會現代の第一人者」と稱せられ、「監督、學者、思想家、導師、預言者、聖徒」並に「復活教壇」の創立者として、其聲望、アングリカン、コムミュニオンの内外に大なりし監督チャールズゴア博士が、一昨年、一月十七日、八十歳の誕生日に先つこと五日、ロンドンにて逝世せしことは、キリストの全公會の爲に大なる損失として痛惜せられ、又神の榮光とキリストの公會の爲にせる其偉大なる貢獻の故に、神に感謝のさげられしことは、尙我らの記憶に新である。

監督ゴアは、千八百八十二年、其最初の著書を公にしてより、臨終まで五十餘年間、筆を投ぜしことなく、其著作は或は神學書に、或は聖書講解書に、或は説教集に、或は小冊子に、或は論文等に、大英圖書館の目錄に見ゆるだけにも、七十餘種に上つて居る。而て此「嘆願」靜想は實に其絶筆である。本書は病中に執筆せられしものなるが、監督の逝世の翌日、ロンドンのモーブレイ社より出版

せられた。

監督は千九百三十年の秋冬の候、最後の印度訪問を爲し、老齡にも拘らず元氣旺盛、東奔西走、或は説教に、或は講演に、或は靜修指導等に從事し、翌年の春、歸國せしが、秋の頃より、過勞の影響あらはれ、心臓に故障出でし爲、醫師より翌年のイースターまで靜養を命ぜられた。やがて小康を得るや、幼少の頃よりの如く『一時間も空費せず』とて、又執筆を初めた。其年十月、一舊友に書を寄せて予は「心臓衰弱」の故によりて六ヶ月間、説教若くは講演を爲すことを禁じられた。されど目下、一小著に從事して居る

(2)

と告げた。此「一小著」こそ故監督の絶筆となりし本書である。菊版半截、九十七頁の小冊子の中に『彼の説教——社會的、教義的、修養的の一切の説教を打ち込みしものであつた。』げにこれは故監督の筆に成れる「偉大なる小著」(Great little book)であつた。原稿は出來し、十一月には印刷に附せられた。監督はみづから之を校正し、翌年一月十八日に出版せられた。されど惜しい哉、著者は、其

前日、既に世を逝て居た。

白石庵敬神叢書は、其中に信仰生活の修養書をも含むこととなつて居る。此に其第二輯として、此偉大なる神の忠僕の「偉大なる小書」を發行することは、監督の欣幸とするところである。

此「はしがき」を綴る間にも、千九百二十二年、バーミンガムにて初めて故監督に面話し、初めて其講演をきき、次でロンドンにて、親しく其寓居を訪ひしこと、又千九百二十七年にはクローブナー、チャベルにて其説教を聞き、其夏は、ローザンヌの信仰職制世界會議にて再會せしときのことども、彷彿として眼前にあらはれ來り、感慨轉た禁ぜざるものがある。

(3)

出版に當り、幸に出版元モーブレイ社の承認を得たるをよろこぶ。
更に之が承認條件として英貨二ギニー(邦價金參拾七圓七拾壹錢)を同社に送

金するに當り、當敬神叢書に多大の關心を有つ一監督インスペクタが之を寄贈せられし好意を謝す。

千九百三十四年昇天日の前宵池袋にて

監修者 兼 譯者

目次

序 引	
一、呼び求の祈	一
二、哀 願	二〇
三、懇 願	四七
四、教會の爲の歎願	五
五、我國と他の諸國の爲の歎願	六
六、萬民、神に立ち還らん爲の歎願	七
七、すべての受難者の爲の歎願	八
八、結末の歎願と短禱	九
九、「第二リタニー」	一〇

序 引

本篇の目的は實際的かつ修養的にして、「歎願」を一層よく鑑賞し、一層よく規則正しく用ふることを奨励せんとするに過ぎない。予の信ずる所によれば、リタニーは、祈禱書若くは禮拜に關するあらゆる文献中、最も高貴にして、かつ人の心腸を探ぐる敬神修行の方便の一である。されどこれが序引として、其特質と歴史に就て略述することは、無用であるまい。

小リタニー、即ち「主よ、憐れみたまへ」(the Kyrie Eleison) にて始るリタニー一般の特質は、短叫的にして、司式者によりて發言せられ、民衆によりて應答せらるる簡潔にして痛烈なる種々の歎願より成る。これはリタニーの一般的特徴である。成文的禮拜式に見るも、將又、教會の内若くは外にて行列祈禱を爲して歌はるる場合にも、いづれにもせよ、リタニーの特徴である。然るに現用のリタニーは、古き種々のリタニーの流を汲み、其材料の多分をこれらより藉り來

れるも、其特質に於ては、短叫的なること比較的少ない。これは會衆の短禱が少數ながら、長き嘆願に結び合はされて居るからである。さればとてこれが爲に研究と靜想の價値を減ずることはない。

千六百六十二年の祈禱書に見る「リタニー」、即ち「一般嘆願」は、千五百四十四年、フランスとスコットランドとの戦争を見込み、ヘンリー八世の命によりて編成せられし「リタニー」と殆んど同一である。さりながら左の相違點がある。

一、千五百四十四年以來、殘存せし『我らの爲に祈りませ』に伴ふて、「神の母」マリア、並に諸天使(其位に應じて)及び諸聖徒(其階級に應じて)を祈求することの撤去せられしこと、(此外に女皇の爲に「願くは敬虔と尊榮と子孫とを増し加へたまはんことを」との奇妙なる祈、並に「願くはロマの監督の暴虐と其甚しく忌むべき極惡無道より」救はれんことをとの祈も撤去せられたこと)。

二、中世の祈、「教會のすべての監督、牧師並に教職」の爲の祈は、千六百六十二年には、「すべての監督と長老と執事」に變更せられ、皇帝の強要によりて、主禱に挿入せられし「誘惑に陥らしめたまふ勿れ」との註釋句は、千五百四十九年の祈

禱書に撤去せられ、最終の祈禱にも變更は加へられたこと。

リタニーは中世紀に行はれたる昇天節祈禱季節、並に他の特別なる場合に於ける行列祈禱用リタニーを想ひ起さしむ。實際「行列祈禱」と「リタニー」とは互通の語であつた。「跪きて行列祈禱を歌ひながら」といひ、又主日毎に莊嚴聖餐に教會内に常に「行列祈禱」ありしといふが如き奇妙なる句のあるも、これが爲である。然るにエドワート六世の「指令」によりて、其行列（正當の意味に於ける）は撤廢せられ、「莊嚴聖餐直前、長老は唱詠隊の人々とともに教會の中央に跪き、英語に表はされたるリタニーを、共に伴ふ會衆の短禱とともに歌ひ、若くは唱ふべし。此外如何なる行列即ちリタニーをも使用すべからず」とせられた。

又エドワード王第一祈禱書、並に後期の祈禱書には、水曜日、金曜日に、リタニーを使用すべしと命ぜられて居る。千九百二十八年の改正祈禱書には、此「指令」は「許可」に變更せられて居ることは大に遺憾に堪へない。然るに改正祈禱書は、主禱の終までのリタニーと、これに次ぐ第二リタニーとも稱すべき第一リタニーに附録せられたる「特別懇願」（詩篇と答唱、唱和と特禱より成り

て折に觸れて使用せらるべき」との間を區別したるは其宜きを得たるものである。

何時にてもリタニーの使用せらるる場合、これは正當にかつ本來、聖餐式の前に行はるべきものなることを念頭におかねばならぬ。

リタニーの歴史は一先づこれにて止め、以下其内容に關する靜想に進まんとす。

リタニーは其措辭の美と莊嚴に於ては、無二の寶たるとともに、又祈禱の道場である。其美點に就て、デアマー博士の概説するところを左に引用する。

『祈禱書のリタニーは、行列祈禱の本來の二つの目的——災害と危険に對する保護と地の産物の爲の祈禱——を結び合すとともに、大に代禱の範圍を擴大し、今日にては英語の眞髓たる感動的にしてかつ音樂的なる辭句にて人間のあらゆる要求と危害と悲哀と憧憬並に完徳への努力をあらはし、二の美はしき懇願に於て、會衆は初めて自家の必要なるものを祈り求むることに終つて居る。これを近世の多くの敬虔修行書に見る浮薄にして利己的なる精神と對照するとき、我らは大に英語リタニーを誇りとせねばならぬ。何故となれば、我ら

は基督教世界と其然らざるとを問はず、全世界に向ひ『これこそ如何に我らは祈るべきか、これこそ生と死と神と人とに關して如何に我らは考ふべきかを示すもの、これこそ實に萬人によく知られ、よく好まれ、又よく諒解せらるる我ら常用の勤行、一般向の勤行であるからである。』

此の最後の一句の眞實ならんこと、或は眞實になりつゝあらんことは、予の切に望むところである。されど或は多くの教會にありては、其反對ならんことを恐る。

一
呼 び 求 の 祈 (The Invocations)

天の父なる神よ。我ら罪人を憐みたまへ。

世を贖ひたまひし子なる神よ。我ら罪人を憐みたまへ。

父と子より出る聖靈なる神よ。我ら罪人を憐みたまへ。

至聖にして榮光ある三位一體の神よ。我ら罪人を憐みたまへ。

註一 クラムマーは、これら神を呼びまつる祈を敷衍した。拉典語リクニにては、これらは更に簡略にして、(主、キリスト—主よ、憐みたまへ)との序句の後、「天よりの父なる神よ、我らを憐みたまへ。世の贖王なる子なる神よ、我らを憐みたまへ。聖靈なる神よ、我らを憐みたまへ。聖なる三位一體の神よ、我らを憐みたまへ。」とある。此點に於て簡短なる方、好ましといふドウデン博士のいふ所に予は賛意を表す。

註二 英語の「天の」は拉典の「天よりの」代である。これと同様に聖徒ルカ傳十一ノ十三の「まして天の父は……」希臘語新約聖書並に拉典語新約聖書にも、ともに「天よ

りの父」である。天は神の行動の出所とせられて居る。恐らくリタニーに於ては「天上の」"heavenly"といふ方よからんか。ドウデン「祈禱書の技巧」一五三―四頁参照。

一、禮拜は崇敬を以て始る。主禱の第一節は、「願くは天に於ける如く……御名を聖となさしめたまへ」である。禮拜は天に在る御使等の第一義の仕事である。地上に在る我らが祈の爲に跪くは、天上の仕事――其禮拜、其交誼、其の慈惠的活動に参加することである。かくて主禱に於ても、我ら自身の欲求を言ひ表すことを許さるる前に、先づ天界の至要事たる崇敬を想起せしむる歎願を用ひざるを得ざらしめらる。リタニーも亦三重の御名の下に、神への崇敬を以て始る。

近時ルドルフ・オットー博士は、其著「聖の觀念」に於て、神の神秘的威嚴を力説して、歐洲並に北米の大部分の神學的意識を驚駭せしめた。其謂ふ所によれば、全世界あらゆる宗教に於ける禮拜行事を見よ、絶大なる而かも魅惑的なる神秘の念の下に皆頭を垂れて居る。神に近くは神秘的にして莊嚴極まる或ものに近くのである。「雲と暗は彼をめぐる」。さりながらクリスチャンにとりては、畏敬の

念はあり、又輕々しく神に近くことは、浮薄の甚しきものなりとするも、「莊嚴極る者」は、全然理解し難きものではない。かりに自然界に於ける神の啓示は畏怖の念を緩和せずとするも、預言者の教説によりて漸次に、又御子によりて最後に、爲されたる神の啓示、即ち自己啓示は、我らの子たることの確信を保たしむるに至つた。萬物の竟極の原因にして、又造主たる神は、其性格と人間に對する目的に關する限り、御子イエス・キリストによりて、自己を顯はしたまふた。神は其測り知るべからざる存在を、何人も諒解し得る人間的性格と、何人も諒解し得る人間的の友の言に移したまふた。萬物の造主にして、其内住の權能、即ち靈によりて宇宙全體を統導したまふ神は、純粹に慈悲深くゐます。キリストの性格、キリストの愛、キリストの憐憫は、神の愛に外ならない。

智的命題として考察するとき、「神は愛なり」との定理は、承認すること困難である――或者には、基督教教理中の最も難解のものなりと思はれる。さりながらこれは嘗に我らの主の教の一要素たるのみならず、其行爲に於てにもせよ、其性格に於てにもせよ、神の一切の顯現の總和にして、又其眞髓である。さりとして此

顯現なしには、神の仁慈への此根本的信仰を否定せねばならぬといひ得ない。此信仰を支持し得べき強固なる根拠が存するからである。

かくの如き根拠は、概して自然界には聖の美に比ふべきものなしとする良心の立證に依存する。然も凡そ自然界の過程に於て至高至善なるものは、確に神の最上の像であらねばならぬ。されど又自然界の事實にはこれを否定する根拠もなしとせぬ。キリストの立證は、このことを否定するよりも、むしろ充分にこれを信認せしめんとするのである。げにキリストは此困難を説明せんとしたまはない。されど根本的實在を啓示せんと主張したまふ。「子の外に父を識る者なし」げに神の純然たる仁慈を信することを拒絶するは、極めて少數の者の爲し得るところにして、全然キリストに背を向け、全然キリストを度外視するものである。何故となれば、さきにいへるが如くに、これはキリストの教の總和にして又本體たるとともに、其一切の行動を説明するものであるからである。

かく我らは先づ最初に神を呼びまつるに當り、崇敬を以てする。

一、我らは「悲惨なる罪人」である。これには一點の疑念を挿む餘地はない。人

類はこれを一調めとして見るときは、墮落せる存在にして、神は常に我らの造主にいてみすのみならず、又われらの贖主にています。神は我らを、我らの罪によりて亡失せる尊嚴に復舊せしめんとしたまふ。肉體を採りて世に現はれたまひし御子たるキリストによりて、特に表現せられたるは、贖主としての神の方面である。勿論、キリストは贖に於けると同様、創造に於ても、まことに神の代理行爲者にていました。「成りたる物に、一として、之によらで成りたるはなし」。されど其教よりするも、其治癒の奇跡——これは事實たるとともに又象徴であつた——よりするも「我らの爲に」、犠牲の死を遂げたまひしことによりてする其復活よりするも、將又「我らの爲に執成さんとして生きて」、其人性に榮光を受けたまひしことによりても、御子は最も明白に贖主にています。

かくて我らは永遠に在す御子、我らの贖主にていますキリストを崇敬する。

三、さりながら若し我らにしてイエス、キリストの外に放任せられたりとせんか主が我らの爲になしたまひしこと、其死に至るまでの犠牲の死すら無益となり、我らは主の降臨あらざりし以前に異らず薄弱なるものとなつたのであらう。従て

我らの主の我らの爲になしたまふ所は、我らの衷に爲したまふ所と決して離してはならぬ。主が我らの爲に獲得したまひし赦免——過去の羈絆より解放したまひしこと——は、何ら憚るところなく「主のいましめの途」、即ちキリストに於ける聖に進む新生の途を歩み得んが爲である。主がかく我らの衷に爲したまふことによりて、「我らのうちにキリストの形成るに至るは、畢竟、榮光を受けし御子の人性を経て、父より出づる聖靈の御業にして、我らを「キリストの體」たる教會に合體せしめ、教會のうちに我らを支持したまふからである。

故に我らは潔め主としての聖靈を崇敬する。

四、これらの三の「バーソン」(格位——かくいふより他に他の語はない)は、其相互作用によりて、一の神を構成することは、神の自己啓示通りである。神は單調なる單元實在にいます、其内部に生命の充満——即ち愛と思想と交の運動を有したまふ。我らが現に瞥見することを許されてある神の内部的實在は、これを後に仰ぎ得べき神の完全のビジョンに比ぶれば、いふに足らぬほどである。

聖なる聖なる聖なるかな

つみあるめには みえねども

みいつくしみの みちたれる

かみのさかえぞ たぐひなき

五、かく「父と子と御靈の御名によりて」、神を呼びまつることは、リタニーの根基をなすものである。舊リタニーには、これに次で、我らの爲に祈らんことを諸聖徒に求めて居る。

かりに我らは公禱より、諸聖徒に直接に祈り求むることを、排除したることを承認するも、——げに教會生活の約七百年間、我らの知る限り、基督教國の公禱には、此種の祈求は存在しなかつた——「コムプレケーション」、即ち諸聖徒の代禱が、我らの爲に助となるやう、神に祈る祈を全然放棄することは、決して其宜しきを得たるものでない。何故となれば公禱にても、私禱にても、苟も祈に身を委ぬる以上、我らは決して新奇のことを爲すのでなく、又我ら自身のみ孤獨の努力を爲すのでないからである。神の御前に絶へず捧げらるゝ一の祈がある。この祈は榮光を受けたまひし我らの主の永久の代禱に、其源泉と中心を有て居る。

御使や、諸聖徒や、信仰を懷て世を近れる者の大群の祈と、此世に於ける全公會の祈とが皆此に合流して居る。されば我らが祈らんとするときは、この永久的にして全括的なる祈、即ち「キリストの體」に於ける聖靈の代禱に参加するに過ぎない。この代禱こそ、あはれむべき斷續的たる我らの注意の缺陷を補充し、我らの敬虔修行の貧弱なる努力を豊富にして、いつか神の御國の來るとき、其全範圍に渡りて、聽かるべき祈の本流に合致せしむるものである。

六、「小リタニー」と、終の主禱に至るまでの、リタニーの殘餘の部分は、我らの主にさゝげられたる短禱を成して居る。凡そ正規的の基督教祈禱は、御子に由り、聖靈の能力にて、父に捧げらるべきものである。初代祈禱式には祈は皆然か捧げられて居る。然るにイエスに捧げられたる祈と讚歌の數を増すに従ひ、イエスに關する俗間の思想に於て、屢々不幸にも慈悲ふかき救主と、畏怖すべき父とを區別することゝ聯想せらるるに至つた。

勿論、かくの如き觀念は今日にては全然其影を沒した。されど御子は「父と一體なり」——即ち分離すべからざる神の存在に屬するが故に、御子又聖靈を、祈

に於て呼び求めることは其宜しきを得たものである。かくの如き祈は含蓄的には實際父に捧げらることは免がれない。何故となれば三位は一體であるからである。

かくて特殊の必要上、リタニーが教會の定時祈禱に慣用せらるゝに至りし時より、祈に於て御子イエス・キリストを呼びまつることは、基督教リタニーの要髓となつた。苦悶の裡にさゝげられたる聖徒ステパノの祈はこれが豫型である。

、註）此事は又不幸にも聖靈の內的交際と不斷の祐助とを忘却せる事とも關聯して居る。

哀 願 (Deprecations)

主よ。我らと先祖との咎を思ひたまふことなく、又我らの罪を罰したまふこと勿れ。憐憫ふかき主よ。貴き血にて贖ひたまひし民を赦し、世々怒りたまふこと勿れ。

主よ。赦したまへ。

一、凡ての罪惡、災禍、惡魔の術策、主の怒、かぎりなき罰より

主よ。救ひたまへ。

二、心の暗きこと、高慢、虚榮、偽善、嫉妬、憎惡、怨恨、及び凡ての無慈悲よ

り

主よ。救ひたまへ。

三、淫行と凡ての重き罪、また世と肉と惡魔の欺より

主よ。救ひたまへ。

四、雷電、暴風、洪水、地震、火災、疫病、飢饉、戦争、凶殺、頓死より

主よ。救ひたまへ。

五、徒黨、密計、謀反、邪道、異端、分裂、及び心を頑固にし主の御言と誠命とを輕んずることより

主よ。救ひたまへ。

註一。千五百四十四年以前、世に行はれ居りし諸種のリタニーには、呼び求の祈と哀願の中間に『慈悲を垂れたまへ。主よ。赦したまへ』との言があつた。グラムマーは此代りに、從來、悔罪詩篇への答唱たりし、『主よ、……思ひたまふことなく……』を挿入した。但、最後の言、『汝の嗣業を壊滅に委れたまふことなく、永しへに我らを忘れたまふ勿れ』を除いた。

註二。グラムマーのリタニー並に我らのリタニーに於て次に來る哀願は、拉典リタニーに於て十二若くは其以上なりしものを、五の應唱短詩に短縮せしものである。災禍「偽善」、「嫉妬」、「凡べての重き罪と欺騙」等は新挿入語である。「頓死」は保留せられたらんにはよかりしと思はるる「突急にして思掛なき死」に代りしものである。「謀反」「異

端」は、千六百六十二年の挿入句である。「心を頑固にし、主の御言を輕んずること」も、亦タラムマーのリタニーに始めて見し所のものである。

リタニーの歴史は、これらは特に悔罪の勤行なることを示して居る。これらは神の審判の下に苦しみ、若くは怖れたる神の民の、熱切なる懇願としては當然のこととはいへ、これらの厄難より免かれ、若くは救ひ出されんことを祈願するものである。此種の「主を畏れる」ことは、確かに今日の我らにも必要である。これはイスラヘル¹の預言者と詩篇作者の特色である。而かもこれを排撃せんとするは、決して其賢明を示す所以でない。自然界に關する我らの智識は如何に増進せしとはいへ、我らは依然として、我ら自身到底如何とも統制し得ず、又先見し得ざる「權能」の掌裡に在ることは眞實である。又我らの理性も、信仰も此統治の權能は苟も罪に對しては、人にも、國民にも、審判を以て臨みたまふ人格的の神、義なる神なることを認識せざるを得ざらしむることも、依然として眞實である。尤も我らは特更に神の審判の證左に對して眼を閉ぢ、又これらの證左が當然刺激せんとする謙て罪を悔みて「神に立ち還ること」を怠り得ないわけでもない。

さりながら罪に對する神の審判は明白である。有名なる「不可知論者」のトーマス、ハツクスレーは、「苟も不道德の痕跡の存する所、社會的不秩序を來らすは、自然界の定則なることは、身體不養生に身體的疾患の伴ふが如し」といひ、又此一定不動の道德律に關し「堅固にして活潑なる信仰の女僧フリスチスなることは、科學の「高貴なる使命」なりと主張して居る。歴史に見る文化、帝國、並に教會の大没落は、周到に考察する場合、其根本的原因是道德的なるが故に、これらを當然審判なりと考ふることを否定し得られやうか。ロマ帝國若くは十八世紀フランス帝政時代、若くは二十世紀のロシア等の文化の道德的氣風は腐爛して居た。今日のわれらの文化を脅威する種々の原因も亦、古のヘブル預言者等が絶叫せしとき2の如く、所詮、道德的のものなることを無雜作に否定し得られやうか。

「金錢は彼らの破滅、彼らの罪なりし」と、エゼキエルはイスラヘルに對して叫んだ。「エゼキエル七ノ十九、モファツト譯）。エゼキエルは又ツロに對して叫びていふ「汝の交易の多きが爲に、汝の中に暴逆滿ちて、汝、罪を犯せり。……汝、その美麗のために、心に高ぶり、其榮輝のために汝の智慧を汚したり。」

汝、正しからざる交易をなして、犯したる多くの罪を以て、汝の聖所を汚したれば、我、海の中より火を出して汝を焼き、凡て汝を見る者の目の前にて、汝を地に灰とせん。國々の中にて汝を見る者は、皆汝に驚かん。汝は人の戒懼となり、限りなく失せ果てん」(エゼキエル二八ノ十六―十九)。又ソドムに就ては「汝の妹ソドムの罪は是なり。彼は傲り、食物に飽き、其女子らとともに安泰にをり、而して難める者と、貧乏者を助けざりき。彼らは傲り、我前に憎むべき事をなしたれば、我、見て彼らを掃ひ除けり」(エゼキエル十六ノ四九、五十)。

以上の句節は、イスラヘル¹の歴代預言者の中の一人より引用せるものである。されど其言ふ所は預言者一同の口にせし共通の「重荷」である。無論、彼らは、神は何時如何なる手段によりて、或人民、或階級の社會罪惡を審きたまふことを正しく先見し得なかつた。さりながら彼らは神の行動の法則を極めて明瞭に看取した。

宣教の初に當り、我らの主はナザレの會堂にて、唯イザヤの「慰の言」のみを引用し、「神の怒の刑罰の日」なる末句を省略して、(ルカ四ノ十八、十九)此世に來

れる目的を告げたまひしが其宣教の終に際し、神の選民が主を拒否せしとき、主は其メツセージに於て、イザヤよりの引用を完結して、「刑罰の日」、エルサレムに降さるゝ神の審判は、不可抗的にして、かつ速かに成就せらるべきことを、公然告げたまふた(ルカ二十一ノ二二)。

世には「經濟上の法則」なるものがある。されどこれが人間社會、即ち理性を備へし人の共同生活に及す効果如何は、これを使用する方法如何、即ちこれを神の道德的目的に適ふやう使用するか、或は、これに反するやうに使用するかにある。我らは今や産業文明の崩落せんとする時代に生存しつゝありとは、常に耳にする所である。過去幾世紀間に亘れる我らの産業組織は、虚偽の價値と、斷然反基督教的なる諸原則即ち「諸般の悪しき事の根なる金を愛すること」(テモテ前六ノ十)、階級と階級の間、個人と個人との間、國民と國民との間の愛を、いづれも否定することゝなれる商業上飽くことを知らざるあらゆる個人的競争——に根ざせることを無視せんとするは、正に盲愚の至りである。歐洲大戰の突發に際し、著しく喚起せられし自己犠牲は、大戰の前にも、大戰中にも、將又大戰の後にも、

我らの「業務」に何ら顯著なる表現を見ざりしことを否定し得るや。我らの社會の特徴たる奢侈と貧困の兩極端の併立は我らの主があらゆる人間の靈魂に歸したまひし靈的價値の同等なることを甚しく侵犯するものなることを否定し得るや。我らの淫慾耽溺、快樂追求を言譯し得るや。然らば我らは當然神の審判を期待すべきにあらざるか。然るにも拘らず、此期待は、識者の「危機」に關する警告にも、將又、一般民衆の意向にも、著しく缺乏せるにあらざるか。我らは正に衷心より此祈をさしげねばならぬ。「主よ。我らと先祖との咎を思ひたまふことなく、又我らの罪を罰したまふこと勿れ」。

「他人の罪を告白し、先祖を非議して、何の益する所ありや」と謂ふものあるを我らは屢々耳にする。されど神は個人を審きたまふに當りては兎に角、世界を統べ治めたまふに當り、確に「其罪を子に報いて、三四代に及ぼし」たまふ。我らの主が我らに望みたまふが如くに、聖なる畏敬を以て神を恭ふ者に、神に求めたまふことは、現今國民一般に蔓延せる罪の共同的責任を看取し、一人残らず其責任を痛感することである。改造せられたる社會は、唯深刻なる悔改の上のみ築

かれ得る。而かも此の深刻なる悔改すら、道德的盲昧を脱せる「忠信なる残れる者」より始めねばならぬ。

我らは皆審判を期待し、又これを受けねばならぬことを知るも、我らは弱くして、頼るべきものなるが故に、此會衆短禱に於ける如く、神の慈悲を請ひ求め若くはリクニの終の特禱に於て祈るやうに教へられて居るが如くに、「我ら受くべき災禍」を防ぎたまはんことを祈るは當然である。同時に我らは徒に袖手傍觀して待つことなく、現今、國民生活並に國際關係を脅威する事情を、進んで矯正する爲に、勇敢に邁往することも、我らの義務である。

元來、神の審判は、其意味する所、我らをして、謙りて神の足下に伏せしむることになれば、これを承認し、進んでこれを歡迎するとも、審判は破壊する爲にあらず、却つて改造する爲なることを決して忘れてはならぬ。若し我らにして神の爲したまふ所を妨ぐるることなからんには、神は「我々のうちより汚穢を取りのぞき」たまひて（エゼキエル二五ノ十五）、預言者と我らの主が教へたまひしが如くに、正義と同胞愛の原則の下に、贖はれたる社會生活の光榮に於て、謙りなが

らも、更新せられて立ち得るに至るであらう。

終りに、眼ありて見る所のものは、一見唯少數の如くなるとも、決して意氣を沮喪せしむべきでない。我らの主が一層よく古の使命を諒解して、之を世界に遂行せんが爲に、其「新イスラエル」を建設したまひしときも、事情はこれと同様であつた。然も主は少數の男女を基本としてこれを建設したまふた。各國民の歴史に於て、多くの時期には、社會救済は少數者に待つ所あつた。我らが痛切に必要とする回心、神への回心は、唯個々の靈魂のうちのみ作用せらる。

以上の如き思想を念頭におき、以下リタニーの五の「哀願」を考察せんとする。

(23)

第一は救即ち贖に對する一般的の祈求である。これには我らは大なる闘争に従事せるものなりとの念が我らの想像に横つて居る。今日のわれらに、時としてこれは、全然見ざる所なるが、此闘争は不可見界にまで及び、我らは惡と惡魔と其使等とも闘ふものなりとせられて居る。「我らは血肉と戦ふにあらず、政治權威、

この世の暗黒を掌どるもの天の處にある惡の靈と戦ふなり」(エペソ六ノ十二)。

「この故は神の武具を執れ、汝ら惡き日に遭ひて、仇に立ちむかひ、凡ての事を成就して、立ち得んためなり」。我らの主が降臨したまひし世界は、惡靈纏繞すとの念深く人心に印刻せられ、又これが爲に意氣昂らざる時代にして、此怖るべき勢力より逃れんが爲に、男女とも宗教のあらゆる低級の形式——「密儀」^{ミステリ}、禁厭護符、其他呪文等を熱心に追求して居た。我らの主は善靈惡靈の現存することを人々に教へたまふ必要がなかつた。主が人々に教へんと欲したまひしことは、主自身に、又主を信する信仰に、惡靈を壊滅して、其立處^{たちど}なきに到らしむる能力の伏在することを知らしむることであつた。

(24)

かく惡靈を怖るることは、今尙世界の諸所に於て、宗教上、顯著なる又時として最も顯著なる動機となつて居る。此種の低級の宗教には、多分の迷信並に詐偽が附隨して居る。今日の智識界は此種のものを見捨てて來た。されば我らの主は或意味に於て、これを蔑視したまひしも、他の意味に於ては、然かしたまはなかつた。主は惡靈界を蔑視し、これを蹂躪したまふた。さりながら主は善靈惡靈の

現存することを假定し、其弟子をしてこのことに信を措かしめんとしたまひしは確實である。

我らの主は單純に、かつ寫實的にこのことに言及したまふて居る。新約聖書の記者すべても亦同様である。科學は我らより此信仰を奪ひ去る何ら妥當の論據を有ら合はせて居ない。

此洪大無邊の宇宙には、唯此一小惑星に於ける人類以外に、理性を具備せる何ら他の靈的存在を包在することなしとするは、迂愚の極であると思はれる。而て若し人間以下若くは人間以上の無數の諸靈が存在し、かつ理性を具備せし人間の如くに、或程度の自由意志を附與せられて、創造せられたりとせば、これらの諸靈も亦人間の如くに、其自由を亂用して、「敵」とならないとも限らない。世界に於ける神の善良なる目的を壊滅せしむる爲に、萬世に亘る一定の計畫の下に組織ある軍勢を操縦しないとも限らない。我らの或者には、此種の組織あり連絡ある惡の能力を疑ふには、あまりに有力なる證據ありと思はることは、恰も我らの私的經驗に於て、殆んど觸知し得るほどに惡魔に直面せりと思はる時の存すると

同様である。

されば我らは迷信と、惡靈に關する妄想とを打破する點に於て、我らの主の獎勵を甘受するも惡靈の存在を否定するもの愚を學ぶべきでない。

此會衆短禱には、尙他に無論のこととして假定して居ることがある。即ち「エペソ限りなき滅亡」である。若しこのことは、罪に定められたるものが、永遠に責苦を受くることを意味するとせば——それに相違はないが——われらの良心はこれを承知しない。此種の觀念は神の仁慈いづくし若くは公正と兩立しない。少くともこれは「コリント永久の罰」と改めたい。「エペソ永久」と「エペソ限りなき」とは同一でない。我らは現狀に於ては、果て永久の世界が存立するか、若くは如何なる意味に於て存立するか、若くは我らの現在の經驗するが如き時間の條件の下に存在するやを、想像する能力を持合はない。

加之、罪に定められたるものの狀態に關して、聖徒パウロの言ふ所は、連續せる責苦よりも、むしろ破滅を意味して居る。

かつ永遠の世界とは「神は萬の物に於て、萬の事となりたまふ」所なりとする

ことは、限りなく神に逆はんとする一大「區域」ともいふべきもの——が、唯強制的檢束の下にある宇宙とは、到底兩立すとは思はれない。

又「彼處にては、その蛆つきず、火も消えぬなり」(次に「それ人はみな火をもて鹽つけらるべし」との句伴ふ)といふが如き句は、(マルコ九ノ四三—四九)、熟察するときは、これを課せらるるものにとりては、苦痛は限りなく連續するものなることを暗示す。

(註)新約聖書中、唯一の聖句のみ明白に限りなき責苦の觀念を示して居る。——黙示録廿ノ十。然もこれを課せらるるものは、假想的の形像——「陰府」、「獸」、「偽預言者」である。又黙示録に於ける此世に關する記事は、常に象徴的である。

(32)

終りに、此問題に關しては、我らの良心を束縛すべき教會の何らの決定も存しない。唯初代數世紀間、或有力なる傳統は、陰府を煉獄と變更せんとつとめしことあるのみ。

これに反して、我らは同仁説ユニバーサリズムの如何なるものへも、遁れ得ない。此世に於て、機會を得ること僅に、或は全然これなかりし者にとりては、死後、其機會あるべ

しとの希望を、如何ほど強調し得るとするも、尙我らの主自身は、極めて明瞭に見ることを得る機會を有てる我らは、全然見る機能を失ひて、我眼を見えざらしめ、我らの靈魂を失ひ、若くは滅し、遂に生れざりしならば幸福なりしならんといふ状態に陥るやも知らざること、警告したまふて居る。若し欲するならば我らは我ら自身の地獄をつくり得る。思ふに如何なる同仁説を取る者の論法も、「罪と審判」に關するデーモン、チャーチの嚴肅なる説教(「人生と其狀勢」中に見ゆ)を巧に論駁し得ないであらう。

又「條件的永生」に關しても我らは何ら積極的斷定を爲し得ないと考へられる故に最も賢明なる態度は、「限りなき罰」なる恐るべき句の意義に關しては、知る所なしといふにある。されど若し人間生活の竟極現實に關する眞の教師として、我らの主を信認する以上、我らは我ら自身にとりても、又他の人々にとりても、此種の運命の可能性を、念頭より放棄してはならぬ。

第二の「哀願」は、所謂「靈的の罪」と稱せらるるものなれども「體裁のよい罪」

(33)

——即ち社會に於けるわれらの評判を傷くることなき種々の罪に對するものである。パリサイ人を指導者とせし當時の宗教界に、主は極めて強烈に宗教的にして宗教の爲に多大の犠牲を爲しながら、此に列擧せられてあるが如き罪に陥るべき社會を見出したまひしことは確である。主の教の主要なる目的は、此種の體裁のよき罪は、少くとも淫行、暴行、其他社會の安寧を害し、人々をして「體面を失墜せしむる罪にも劣らず不徳なるものであることを確信せしめんとするにありしこととは否定し得ない。『取税人と遊女は汝ら（體面を装ふパリサイ人ら）より前に天國に入らん』と仰せたまひしとき、體裁のよい罪には、我らの體面を破る罪よりも一層執拗に、一層脱却し難きものあることを半認識せしめんと思召したまひしと察せらる。さればわれらのリタニーにこれらのものが先づ第一に置かれてあることは多とすべきである。クラムマーが此に數へあげたる目錄は實に驚くべき目錄である。これらの項目に關し、一々よく熟考し、われらより此らの罪を除き去ることに務めねばならぬ。

「心暗きこと」は、世に最も普通に見る所なるは、痛嘆すべきである。これは神の御前に於ける我らの真相、果て如何を知らんとすることを拒絶することである。『互に譽をうけて、唯一の神よりの譽を求めぬ汝らは、争で信ずることを得んや』(ヨハネ五ノ四四)と、我らの主は仰せたまふ。人の意見による評價にて満足せんとする精神に對する何たる審判ぞや。

「高慢」は、神を忘れることである。即ち我らが絶對に神によりて依立することを見せんとする愚にして、傲岸なる企圖に外ならない。

「虚榮」は、我らが高下如何を問はず、世に在りて、自己の最善を盡し、神に最もよく仕へんとする代りに、「他人に勝りて」自己を一層光輝あらしめんとする野心である。従て愚かにして、到底實現の見込もなき、種々なる白晝の夢を追ふこととなる。「虚榮」は、我らをして自己中心のならしめ我儘ならしむ。

「偽善」は、我らの内心の保證せざる外部生活を、人々の前に示さんとする精神である。従て「審判の日」に、我らにとりて、秘められたる榮光の表示にあらずして、却て秘められたる耻辱の暴露となるを免がれない。

「嫉妬、憎悪、怨恨、及び凡ての無慈悲」。これらは正に説明するまでもない。されど我らの主が、如何に莫大なる強調を、赦免の義務に置きたまひしか——如何ほどまでも喜で赦さんとすること、即ちこれを以て、常に我らが神より赦さるる條件となしたまひしかを注意せねばならぬ。我らが我同胞を取扱ふ如くに、神は我らを取扱ふたまふからである。

想ふに容赦せざることは、淫慾の如く、其分布は不均當なる罪なることを認めねばならぬ。世には性慾の罪に對しては、自づから處すること頗る嚴なる人にして、容赦は殆んど不可能に覺ゆる者がある。又嫉妬は貧欲には、全然無交渉なる人にして、肉慾の誘惑を拒斥し得ない者もある。信神家は無宗教家よりも、人好きせぬとの非難は、屢々此種の事相に胚胎して居る。このことを認識することは必要である。勿論、我ら皆いづれも永き年月の間には、同様に、かつ我らが忍び得る極限まで試みらるゝに相違なからんも、我らにとりて、最も徹底的なる試験は、人によりて、種々其形相を異にするを見る。然も一旦これに會するとき

は、我らは勇敢にこれに直面せねばならぬ。あまりに留意せずともよきことどもより免かるるやう祈り居るとのことは、最も陥り易き罪に對して奮闘せずともよといふ口實にはならぬ。善徳は一事である。然も「人、律法全體を守るとも、その一に躓かば、是すべてを犯すなり」。

善徳は原則上、一事にして、又積極的の資質である。惡徳より救ひ出されんことを求むるに當り、其の救ひ出さるる惟一可能の途は、基督教的性格を、全體として、眞實に熱心に修養せんと努力することにあることを認めねばならぬ。如何なる特殊の罪に對する戦に於ても、苟も勝利を得んとするには、全力を傾倒して、キリストに似るやう努むるの外はない。基督教の「道」を説く説教者は、否定の方面でなく、宜しく人心を鼓舞すべき、基督教的美德のビジョン——愛と謙遜とを其最も傑出せる特質とする性格を——常に力説せねばならぬ。

尙又「先づ神の國と其義とを求」むる能力は、本來、感情にあらず、理性と意志に在ることを、常に忘れてはならぬ。基督教美德を以て、神を愛し、人を愛することとなりと概括するは、我らの感情への訴にあらず、意志への訴である。新約

聖書に見る「愛」なるギリシヤ語は、感情を示すものでなく、意志の一定の動向をいふ。「なんぢ心を盡し、精神を盡し、意志を盡し、主なる汝の神を愛すべし」とは、言を換へていへば、汝の全生活に於て、決然、神を第一に置けよとのことである。神への奉仕の爲に、汝の全才幹を捧ぐるやう心掛けよとのことである。神に關して、正き思想を懐くやう務めよとのことである。神の御旨に従ふて絶へず汝の生活に、新生活を開拓せよとのことである。

又「己の如く汝の隣人を愛すべし」とは、神の前には、あらゆる種類のあらゆる人は、皆己と同等なりと考ふる習慣を、決然として作ることである。自己中心的若くは偏狭なる思を抱くことなしに、他人に對して行動することである。我らの覺悟は正に「我らの好まぬ人々を愛することであらねばならぬ。若し故意に、かつ不屈不撓に、人々に對して正しく考へ、正しく行動すれば、遂には我らが思ひ設けしよりも、遂に勝りて、其人々を「好む」に到る。こゝに勝利がある。

第三の「哀願」は、拉典リタニーに見る「淫行の精神」に對する短き祈願に代れ

るものである。ピユリタンの徒は死に至るべき罪と、微罪との間の區別を紹入するものなりとしてこれを排した。(サヴォイ會議の際には)これは「凡べての故意に犯す罪」に言及するものなりと説明せられた。ヨハネの言ふが如き「死に至るべき罪」と「死に至らぬ罪」との間に區別があらねばならぬ。これはユダヤ人が區別する不用意の罪と、積柄なる心にて犯せる罪に相當するものである(拙著「聖徒ヨハネの書翰」二〇九頁参照)。然るに教會の懲戒を行ふに當り、此區別はこれと異なる區別と混同せらるる恐がある。——即ち教會が相當の處置を爲さねばならぬ罪——偶像禮拜、背教、殺人、若くは暴行、及びあらゆる種類の淫行と、他の罪とは、同様に神の前には罪たるを免がれざるも、公的若くは人的の懲戒を加へ得ない。前記の種類の罪は、公然たる醜事である。われらは不評判なる罪人(取税人並に遊女等)は、悔改むることによりて、傲慢にして金錢を慕ふ者、社會の上流にある者よりも、遂に容易く天國に入り得るかも知れぬことを、念頭に置かねばならぬ。

然るに此「哀願」に於て、主としてクラムマーの念頭にありし所のものは、其

當時の世に瀰蔓し、今日の我らの社會にも然るを見る性慾に關する種々の罪である。英國に於ても、米國に於ても、男女の性的關係に於て、「解放的なる自己表現」を要求する風が廣く行はれて居る。當今の文學に夥しく其例證を見る所である。この要求は全然誤れる觀念に基て居る。即ち我らは出來合の「自我」を以て世に生れて來て居るとのことである。然るに實際に於ては、我らは感情と能力の一東を以て生れ來れる者にして、嚴密なる自己訓練によりて、我らの情慾を我らの意志と理性の統制の下にもたらし、又我らの意志と理性とを神の統制の下にもたらすことによりて、始めて一個連絡ある自我に總合し得るものである。

(註)「典外書」改譯の際、復舊せられし「教會書」の六章二―四節へブル語本文には戒告がある。「汝の心の權力内に落つるな(汝の情欲の奴隸となるな)恐らく汝の精力を消盡するならん。汝の葉を食ひ、汝の果を破り、枯木として汝を残すに至らん。奔逸するに任せる情欲は其情欲の持主を墜落せしめて、其敵の悦ぶ所のものたらしむ」(SPCK發行、オスマレー著「シラクの子の智慧」參照)

我らの主は眞の自由は唯峻嚴なる制抑によりてのみ獲得せらるべきことを教へたまふ。「汝らは忍耐によりて其靈魂を得べし」(ルカ廿一ノ十九)マルコ九ノ四三―四

七「若し汝の手・足・眼なんちを置かせば、之を抜き出だせ」(參照)。此點に於て、我らの主は世界のあらゆる道德の大教師のいふ所と略同様である。又人間共通の經驗もこれを裏書する。

げに衷心よりの熱誠を以て、此「哀願」を爲すことは、我らの爲に善し。されど不法の情慾に對する根治法は、單に禁止にあらざること念頭におかねばならぬ。これが根治法は「神と偕なる生涯」の眞の美と自由と引力にあることを知るにある。

されど又此「哀願」の終の部分に注目することも必要である。これには尙死に到る罪はあらずとするも、此に到らしむる恐は充分にある。新約聖書は「罪の欺き」に就て、絶へず我らを警告して居る。罪は我らをして虚偽の約束を爲さしめ易い。我らを陥れんが爲に「餌」を置く。「肉の慾」に於けるも、「眼の慾」に於けるも、「生活の高慢」に於ける亦かくの如し。年長者は其多年の經驗上虚偽なりと知る所の自由を追及する青年の情熱を、あまり無理盡に壓迫せざるやう用心せね

ばならぬ。されど然かせずとも、歴史や文學に數多の例證のあること故、青年をして「罪」とは極めて詐欺的の敵なること、並に「事物は見掛けによらぬもの」なることを自づから曉るに至らしむるは、却て其宜きを得たるものであらう。

第四の「哀願」は、物的の災禍に關するものである。「主の禱」に於て教へられてあるが如く、我らは宜しく物的の祝福を祈ることに於て大膽であるべきである。但しこの種の祈は其位置宜しきを得なければならぬ。「主の禱」は、我らをして祈は先づ神の御名を聖ならしむること、其御國を實現せしむること、其御意の遂行せらるることに指し向け、然るのち初めて我らの物的の必要物を祈らざるを得ざらしむ。然もそれすら我らの欲求する所のものでなく、嚴密に我らの必要とする所のもののみ。「來ん日の爲に、我らに日々、糧を與へたまへ」

されどそれは兎に角、世界の統治に關しては、我らの知る所あまりに少き故物的の祝福をいのり、若くは物的の災禍を除き去られんことを祈るは餘計なることの如く感ぜしむ。時としては過ぎにし暗愚の時代には、人々行列をつくりリタニ

を歌ふて物的の災禍より免がれんとせしが、今日にては我らは近代智識によりて、下水工事や農作の方法を知つて居ると頗る冷笑的にいふものがある。努めて日進月歩の科學のあらゆる資源を使用することの當を得たることは、言ふまでもない。「神は自から助くるものを助けたまふ」。されど我らは其作用する所如何を到底知り悉し得ざる力の下にある。さればあらゆる科學的豫防法を用ふることも、我らは尙依然として無能無力なることは、祈に於て物的必要物を供へたまふやう、求むることの本能的にして、又正當なるを覺えしむ。

既にいふ所ありしが如く、クラムマーが單に「頓死」とせしよりも、「急突にして豫想せざる死」といふ代禱の舊式を保留する方遙に好ましかつた。我らの中、何人も臨終の長びく死を好むものはあるまい。されどこれに反し苟も敬虔なるものならんには熟知せる此世より、「神はすべてに於て、すべてにいます」といふこと以外、殆ど何ら知ることなき世界への過渡の畏るべき瞬間の近づきつゝあることを知らんと欲しないものはなからう。予は近世の多數の醫師が、瀕死の危篤状態にあることを患者に告ぐることを禁ずるは、靈的殘酷事に外ならざる故、決して彼

等の謂ふ所に従ふべきものにあらずと考へる。

第五、世には教會と國家とを、恰かも一社會なるかの如く混同するが故に、祈禱書は、時代おくれにして、取るに足らざるもの如く思ふもの少くはない。此點よりして（英國）改正祈禱書に改善を見るところ少きを遺憾とする。

此「哀願」に於ても、「徒黨、密計、謀叛」と「邪道（偽の教）異端、分裂（分派）」とを分明に區別あるものと見す、却て密接に相關聯せる災難の二種類なるかの如くに附隨せしめて居る。さりながらこれを區別するにしても、これが排除の爲には、二群の害惡の排除せられんことを常に祈らねばならぬ。されど我らが徒黨、密計、謀叛より救はれんことを祈るとき、民衆をして反逆を企つるに到らしむるものは、殆んど常に統治者の罪惡、若くは政府當局者の不正にあることを忘れてはならぬ、歴史の絶えず與ふる所の教訓は正にこれである。教會に「分裂」（分派）の生ずるは、教會の腐敗に基くもの、「異端」は概して教會當局に於て、或教理の一面を誇張する場合に生ずるものなることも、亦歴史の教ふる所である。

(44)

さるにても教會には「傳へられたる信仰」「健全なる教」道德並に教義に關する「傳」がある。これらを擁護するは教會の義務である。げに「異端」なる言の使用を限定する要がある。エラスマスとともに、我らは必要なる肯定點は能ふかぎり少なからんことを望む。我らは古の師父らの如く、苟も教義に關しては「聖書によりて證明」せられざる所のもの、何事によらず教會によりて要求せらるべきでないことを固守せねばならぬ。これこそ自由の保障なれ。然るにも拘らず教會の職員として教へ又行動する所ものを拘束する信仰の諸箇條がある。我らは積極的（肯定的）信經の現實性を主張することを必要とする。何故となれば、今日ほど「心を頑固にし主（神）の御言と誠命を輕んずる」こと甚しきはないからである。——心を頑固にするとは、柔和と碎けたる心の反對にして、從順にならしめんとてつとむる神の御聲に關する觀念を冷然として排せんとすることである。

(45)

以上の「哀願」に於て列擧せられたる罪惡のうち、貪欲、即ち金錢を慕ふことの加へられてないことは遺憾とせざるを得ない。

(註)千八百五十六年にデーン、チャーチが、ゼ、ピ、モズレーに、同人者「洗禮による
甦生」(此書牛津運動一味の人々の忌憚せし書なるが)に關して、書き送れる書中に「あ
まりに獨斷的決定多く、かつ思考の自由の限界を殆んどすれど」に推論」せるに心打た
れたとて遺憾の意を表して居る。「中世紀に於ては、況んや教會の初代に於ては、今日教
會の見解と兩立すと思はるる所のものよりは、遙に多くの思辨が行はれた。我らは此點
に過て居ると予は考へる」又いふ「我らの無智に關して貴著のいふ所、大によし。……
完全にして絶對の智識の觀念(これは今日各方面にて、云々せられ、又教へらあるも
の)は、予には極目益々堪へ難く覺ゆる」(デーン、チャーチの生涯と書簡)(百七十三頁
以下)

(46)

三

懇 願 (Obsecrations)

主の肉體と成り給ひしこと、降誕、割禮、斷食、また試みられ給ひしことにより
主よ。救ひたまへ。

主の大なる憂愁と血の汗、十字架とその苦難、貴き死と埋葬、榮光ある復活と昇
天、また聖靈の降臨により

主よ。救ひたまへ。

我らの災禍のとき、また幸福のとき、死ぬる日にも、審判の日にも
主よ。救ひたまへ。

(47)

(註)これらの三の句節は、拉典リタニーに於ける十四の句節を壓縮せるものなりといふ
こと以外、單純なる翻譯である。但し拉典リタニーに於ては、「昇天」に「嘆賞すべき」
といふ形容詞が附せられ、聖靈は又「助主」と稱せられあるが異なるのみ。英語「(D)」に

より)は、拉典語の *per* 即ちの「手段によりて」の代である。此に指擧せられたる種々の「奥義」は概して「喜ばしき」「悲しき」「光榮ある」と類別せられある念珠禱と相應するものである。

我らの主に捧げられたるこれらのしつこき祈は主が既に我らのうちに爲し初めたまひし所のことを、間違なく達成し得んが爲、我らの爲に既に成し遂げたまひし事一切を、御心に思ひ出したまはんことをいのるものと見て差支ない。

いつくしみふかきイエスよ

肉體をとりて成し遂げたまひし

わが救をおもひわれを見棄てたまはざれ。

つかれ、よわりて、苦みの十字架にて

われを贖ひたまひしみめぐみ

いかでいたづらとなるべき。

此種の神への訴——神が其民の爲に引受けたまひし救の、如何に絶大なるかを忘れたまはざるやう訴ふることは、舊約聖書に常に見る所にして、新約聖書にも

亦稀にこれを見る。勿論、靈的教養のある者は、恰も神は忘れたまふことあるかの如くに、これを解釋せず、神が如何に無限の價値を我らの上に置きたまへるかを我ら自身をして回想せしめんとする一種の言表様式と見る。わが送り慣れたる姑息偷安の生活を送り得んが爲に、かくまで言ひ盡し得られぬほどに、神は多くのことを爲したまふ甲斐ありしや。

されど以上の如きは、これらの歎願を正解する道でない。却てこれらの嘆願はキリストの贖の業は、其死によれる自己犠牲と、「曾て殺されしことある」羔羊として、天の處にて自身を供へたまふことによりて、絶極に達せりとはいへ、十字架上に死にたまひしこと、或は貴き血を流したまひしことに極限せらるるものでないとの觀念に基て居る。キリストの贖の業は、主の地上の生涯と従順のドラマ全體に横つて居る。「主よ、我は汝の御意を爲さんとて来る」。「彼は……死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひたまへり」。此従順はもと「神の性(「貌」)にて居給ひしが、神と等しくある事を固く保たんと思はず、反て僕の性(「貌」)をとりて人の如くなる」ことによりて、容易ならぬ「己を空しう」することに始て居る。

かくて我らは引續ける事件の全周より生ずる贖の功果によりて救はれんことを祈る。初めには、神妙なるインカーネーション（主の肉體となりたまひしこと）と、聖なる降誕により、救ひたまへといのる。此に贖の犠牲の基礎がある。これありて後、イエスは従順の生涯に入りたまふた。

割禮と洗禮は、様式こそ異なれ、其初期の段階である。「かく正しき事をことごとく爲し遂ぐるは當然なり」。

次で三重の誘惑、及び神の聖靈と、記録せられたる神の御言の能力とによれる三重の勝利は、贖の業と一段と進める段階がある。インカーネーションは我らの新生の爲なるが如く、誘惑に對する主の勝利も、亦我らの勝利であるからである——主に結び合はせられたる新人性の勝利である。

主は受苦の際にも、又十字架に釘けられたまひし際にも、何らの恐怖も、何らの畏縮も示したまはなかつた。唯、莊嚴なる沈着と自己忘却とありしのみ。ゲツセマネの園に於て、「大なる叫と涙とをもて、己を死より救ひ得るものに、祈と願とを献げ」たまふ主を見たてまつらば、我らが其犠牲の現實を理解するに如何に

多くの助となりたるべき。げに聖餐を制定したまひしこと、自づから進んでおのれを死にわたしたまひしこと、ゲツセマネの園に於ける悲痛なる苦悶と祈禱とは、「貴き死」に於て絶頂に達せる唯一たび献げたまひし大「犠牲」の數階段である。

これらの聖なる過程の各階段とも、各其「功德」——其贖の價値を有て居る。

かくて其埋葬は達成せられたる死に對して最後の斷定を與へ、榮光ある復活と昇天は、犠牲の生涯全體の意義を啓示する。従て我らは復活前日に於て、神の御子の「死に合ふ洗禮を受け」たるものとして、「常に惡慾を殺し、御子と共に葬られる爲に死にて葬られ、甦りたまひし御子の功によりて」祈るやう教へられて居る。

終りに「聖靈の降臨により」救ひたまはんことを祈るとき、我らの留意せねばならぬことがある。若し我らの爲になしたまふキリストの業にして、天にて榮光に入りたまひしことによりて終結し、我らをまた以前の如くに弱きままに放念せられんか、榮光あり、完全なるキリストの模範も、其「死に到るまで」の従順によ

りて、我らの爲に達成したまひし全き和睦やほひも、何の功もなきこととなる。

然るに「他のバラクリート」(神の他の「エーゼント」若くは「代表」)即ち父と子との御靈は榮光を受けたまひしイエスの人性より遣はさる。これはイエス(此世に於ける)の不在を補充する爲でない。却て其臨在を達成せんが爲である。かくて今は完全なる模範たるわれらの眼前のキリストとしてでなく、又「完全充足の犠牲」としての我らの爲のキリストとしてではなく、其外的にわれらに示したまひし模範に似得んが爲に、內的に我らを更新したまふ我らの衷に於けるキリストとして然か爲したまふのである。

世には我らの屢耳にする反對説、即ちキリストの神性を信することは、其模範の偉力と、其救贖の現實とを毀損するとするにも勝れる「短見」は、他にあるまい。

キリストの誘惑は單に其自體を點檢するときは、極めて特殊なるかつ個的の誘惑である。即ち其事件はいづれも皆自身には奇跡力あり、必要なる場合、いつにても、これを利用し得べしとのことを、前以て假定せるものである。これは我

らとはあまりに程度が掛け離れて居る。其全生涯には罪の恐怖らしきものもなく、又何時失墜するかも知れぬとの意識は皆無であつた。さりながらこれは單なる模範としては、われらにとりてはあまりに崇高なる道德的天才の特徴を帯びて居る。然るに實際、キリストの模範をして、歴代永久の能力の本源たらしむるは、福音書に其模範を垂れ、今は天上に活したまふ主が、其御靈により其體の肢たる各自に宿りて、外に示したまひし模範に似得るやう、われらを内に鑄型したまふとの意識である。かくて我らはいつまでも、現異邦節用の古き拉典の特禮を用ひ得る。

神よ。獨の御子、肉體をとりて此世に現はれたまへり。外よりせば、我らと似ていますをけれど、主のめぐみによりて、内によく主に似るものとなり得んが爲に、恩恵を與へたまはんことを祈りたてまつる。

ゆづから神にいます者のみかくの如く、すべての人の靈魂の靈魂となり得たまふ。

贖罪に關する論争の陰鬱なる歴史を思ふとき、此教義を智的に鑑賞するに當り、

クリスチャンの間に激烈なる分争の生ぜしは、畢竟われらの贖罪たる我らの爲のキリストを、我らの新生たる我らの衷に於けるキリストより分離せし爲なることを知て安堵し得る。又我らは我らの爲の犠牲たるキリストを信ずることによりて、無償に賜はる赦免をこよなく光榮あることを感じながらも、かくの如き赦免は「我らの榮の望たる」我らの衷なるキリスト」に、內的に同化する手段たることを忘れざる限り、甚しく誤謬に陥ることもないであらう。

(54)

「懇願」は我らの心に深く刻み込む祈を以て結ばれて居る。人生には特殊の誘惑に際會するときがある——我らの「災禍のとき」——天は全く暗み、神への信仰も全く絶滅せしめらるるが如く覺ゆるときがある。或は「幸福のとき」萬事好都合にして、此世を充分に樂み、仕事も亦愉快に運ばれて、神は全然我らの慮外に放擲せらるるときもある。これらの誘惑は今日も我らに迫る。

やがて人生の水平線上、我らが世を去るとき近づき來り、「死ぬる日」と「審判の日」に直面するとき來る。しかも我らは『獨で死なねばならぬ』。友誼濃かなり

し社交の聯想も、樂き家庭に於ける買ひ被られし我らの評價も、一切皆亡せ去り、一切皆忘れられて、住み馴れし此世より、殆んど何ら知る所なき彼世に移ることとなる。其處にて、われは赤裸々に、不可謬的眞理の審判に直面せねばならぬ。

以上の如き人生の經驗と大過渡の期待とは我らをして、神の性格と目的とに關して、我らの知れる所一切を心に呼び起して、われらに附纏ひわれらを脅かす惡より「救ひ」たまはんことを祈るに至らしむ。

(55)

教會の爲の歎願 (Supplications)

一、主なる神よ。願くは我ら罪人の願をきき、天下の聖公會を正しき道に導き給はんことを

主よ。聽きたまへ。

二、願くは監督、長老、執事の心を照して、眞に主の道を悟らせ、又その教訓と行爲にて、之を宣傳へさせ給はんことを。

主よ。聽きたまへ。

三、願くは今執事と長老の職に任ぜられんとする主の僕らを祝し、主の祝福を彼らに注ぎ、その職を正しく行ひて、聖公會の徳を建て、御名の榮光を顯はせたまはんことを。

主よ。聽きたまへ。

四、願くは全世界に於ける教會の働を發展せしめ、又收穫場に働く者を遣りたま

んことを。

主よ。聽きたまへ。

(三と四は改正新譯書より引用。三は勿論聖職授手節用なり)

註一。「天下の聖公會」(Church universal)は、勿論、*ecclesia catholica* の譯である。エドワード六世の第二英國新譯書と、エリザベツ新譯書は「Universal」(天下の)を「Universally」(一般に)に変更せしむ、千六百六十一年に、此譯は舊の如くに逆轉せしは喜ぶべきである。

註二。拉典リタニーと、初期英國リタニーに「教會の監督、牧師並に教役者」とありしを、千六百六十一年に監督、長老、執事」と變更せしは、畢竟これによりて何人が教會の正當の教役者であるか、何人が教役者にあらざるかを明瞭にせんと企てしに相違ない註三。予は義に英國新譯書リタニーには、教會と國家とを同一祀せんとする傾向の甚しきものあるを指摘した。これを關聯して、又皇帝と皇室の爲に、種々な祈を重疊する傾向もある。予は此に教會の爲の代禱を引離して、敢てこれら先へ置くこととし、かつ千九百二十八年の改正新譯書に見ゆる新代禱をも加ふることとした。

一、「哀願」の終にある「主の御言を輕んずることより……救ひたまへ」との祈に

就ては、既に考ふる所あつた。此には聖職の、「心を照らして、眞に主の道(「御言」)を悟らせ」たまはんと祈り、後には、主の凡ての民に、「ますく恩恵を加へ、御言を聴き、眞心にて、これを守」るに至らしめたまはんと祈り、又「御言に従ひて、行爲を改め」しめたまはんと祈る。

「神の御言」とあるは、廣義に解釋せられ得ることは、無論なれども、以上の場合にいふところは、記録せられたる神の御言たる聖書を意味して居る。これを民衆の言語に翻譯し、これを公に朗讀することを、公禱の最も肝要なる部分とならしむべしと主張せしは(英國)宗教改革の特殊の光榮であつた。

加之、アングリカン教會(聖公會)に於ては、信經並に他の信條に載せらるゝ教義上の傳統を固持し、これを主張するにも拘らず、聖書によりて證明せられ得ざる如何なることも、クリスチアンにとりて、信仰の要項とせらるゝことなしと絶へず力説して來て居る。若し教會は教ゆる權能を賦與せられありとせば、これを證明するのは聖書である。

かく聖書を固執することは、古代教會に訴へて、充分に正當視し得るところで

ある。古代教會師父らの熱心に努力せし所は、民衆に聖書を説明することと、民衆をして、聖書或は其一部分にても自身の爲に所有することを奨励することであつた。師父らの此精神は、聖シールの洗禮志願者に對する警告に於て、概括せられて居る。即ち聖書によりて證明せらるること以外、彼らの教師の教ゆる何事も眞理として承認すなどのことである。

然らば宗教改革後の英國に於て、聖書に對する熱心の燃え上れるも決して怪むに足らぬ。英語聖書はビュリタンの徒の間にも、或は彼らよりも一層祈禱書に忠順なりし者の間にも、信仰と慣行の標準となり、又英國宗教の眞の基礎となつた。此事は今日に至るも尙其通である。然るに過ぐる四五十年間に、聖書に對する態度に、大なる變化を見るに至つた。概していへば、此變化は、其當を得て居る。聖書は「神の御言」なりとのことは、過去幾百年間、苟も正經中の諸書に載せらるることは、假令、其記者は異なるも、皆聖靈の指示の下に書き取られたるものなれば、如何なる題目に關しても、不可謬的に眞實なるものとして、見るべきなり

とのことであつた。

然るに此事は、實際然からざるが如くに見ゆる。新科學たる歴史的批評を、聖書に適用するに當り、このことは明白にせられた。聖書の載する所の諸書は、種々の出所より、其材料を抽出した。然も其材料は必ずしも相互に調和すといふにあらざるのみならず、其中には、他の各國の文學に見るが如く、あらゆる種類の記事を包含して居る。民間俗説もあれば、口碑もあり、傳説もあれば、道德訓話もあり、又嚴密の意味に於ける歴史もある。されば、聖書記者が、自然界と、其過程に關していふ所は、單に其時代に行はれし普通智識に過ぎずして、何ら科學的智識を有らしにあらざること、又考古學的事項に關していふ所も、決して無謬にあらざること、明白である。

(60)

新約聖書にありては、正當に歴史的の境域にあれども、尙詳細の點に於ては相違あり、四福音書に於てすら、調和し得ない所がある。又四福音書にありては、其基礎的記事を爲せるものは、聖徒マルコ傳である。他の三福音書の背後には、

聖徒マルコ傳の記事が伏在して居ることは、明白である。然るに若し他の三福音書記者にして、聖マルコの記事にして、聖靈の指示の下に書取りせられしものと考へたらんには、他の三福音書記者が爲せる如くに、自由自在に、これを取扱ひ又これを訂正し得なかつたに相違ない。

聖徒ルカも亦、其福音書と使徒行傳の序言に於て、苟も慎重なる歴史家として主張し得ざる所のことを、主張して居ない。

されば文字通り不可謬的なりとのことは、古代の意味に於ては、(此事未だ曾て良心を束縛する定理となることなかりしは幸なり)、舊約並に新約聖書は、純然たる神の御言なりと稱し得ざることは、明白である。

此事は傳統的宗教にとりては、大なる衝撃であつた。しかも聖書の「批評的」取扱なるものも、概して此衝撃をいやが上にも増長せしむるが如きものであつた。批評家の多數は徒らに聖書の「虚偽の口實を暴露する」ことを樂みとせることも明白である。されど批評家等は、或點まで、根本主義者に對して、勝利を得しことを、否定し得ない。

(61)

此度の改正祈禱書（一九二八年英國祈禱書）を見るものは執事按手式に變更を加へられし點あるを看取するであらう。従前の問は、「なんぢら舊約新約の聖書を眞實に信ずるか」にして、これに對して要求せられし答は、「これを信ず」であつた。此問は（近來に至りて以前より稍自由なる解釋を加ふることを許さるゝに至れりとはいへ）もと／＼聖書の不可謬性に關する舊觀念に基きて作句せられたものであつた。少くとも此假定に對し用心する爲、改正祈禱書は、舊質問を其儘保存しながら、一種の註釋を挿入せしことは、多とすべきである。

「汝、舊約併に新約の聖書は、我らの主イエス、キリストによりて成就せられたる神の啓示を、多くに分ち、多くの方法によりて神より我らに與へられたるものと、堅く信ずるか」

これに對して要求せらるゝ所は、「然り」である。

元來、人間の思想の歴史は、多少とも突急なる反動の生じ易きことを示し、又新科學は舊式の智慧を排斥するに當り、極端なる傾向を有て居る。

（聖書に對する舊式の聖書尊敬に對する反抗の精神は確に新批評の大部分にこれを見る。獨逸より來れるものに於て、特に然りとす。されど此反動は誇張せられて居り、かつ極端であつた。曩に引用せる今回の改正の問答に指示せられたる中庸的立場は、眞の立場である。インスピレーションとは、何を意味するにもせよ「新批評家」らが、これを以て、科學若くは考古學に關する不可謬性の天與の賜物を意味するものにあらずと公言することは其當を得たるものである。又舊約聖書に見る宗教概念に漸次的進展の證據あることを力説し、人間の野蠻性に關して、一時、世に行はれし假定は、次第に訂正せらるゝに至れりとするとも、其當を得て居る。又聖書の諸書若くは其或部分は、種々の程度、若くは種々の意味に於て、インスピレーションを受けたるものなりとするも、其當を得たものである。終りに、舊約聖書の種々の部分に見る歴史的のものにあらざる民族歌話、口碑、不確實なる傳説併に道德的訓話を判別するに至りしことも、其當を得て居る。然るにこれに反してヘブル書が「神むかしは預言者等により、多くに分ち多くの方法をもて先祖たちに語り給ひしが、この末の世には、御子によりて、我らに語りたまへり」と確言する所を無功にし、若くは薄弱にするが如き、何物も存しない。

イスラヘル以外にも、ザラタストラの如き者に、預言的インスピレーションが與へられしやも知らずとするも、世には舊約聖書に見る所の如きものに比すべき何物もない。換言せば、神竝に靈的生活に關して多年に亘り、前後相次で起れる預言者の口によりて、亂暴にして、時としては、野蠻的なる民衆を教養し、遂に御子イエスに於て、最後の成就を見たる光輝ある眞理の寄托物を世に残すことであつた。

註。エステル書、傳道書、雅歌は、新約時代の正經の擧目に介在して居るも、新約聖書中に一度引用せられて居ない。これらの書は、種々の意味に於て興味あるも、預言的インスピレーションによりて感觸せられありとは思はれない。却て所謂「非經書」中の或書に、明に其痕跡を認める。されど此題目に關して此に詳論し得ない。

聖アタナシオの言へるが如く、イスラヘルは、確に預言者の嚮導の下に、全人類に對し神と靈的生活に關する智識の神聖なる學校であつた。又預言者は神の國の此福音宣傳上、神よりインスピレーションを受けたる主要なる器なりしとはい

へ、彼らの感化は、律法、智慧の諸書、詩篇併に歴史に同化せられてあつた。又同一のインスピレーションの御靈は舊約諸書全集の上に認めらる。

元來、聖書は其書かれたる精神によりて、讀まれねばならぬ。苟も何人にも神は如何なるものにていますかを知らんとし、又人間にして若し神と交通を保たんとするには、如何に生活すべきかを知らんとし、又創造と救贖に關する神の目的如何を知らんとするものは、舊約聖書が、神のインスピレーションの所産たることを疑ひ得ない。

翻て、不充分なる所あるを免がれざる舊約書より、これが完成を見たる新約聖書に移るとき、我らは福音書に歴史的イエスの眞像を見、又新約聖書一般に於て、神の其御子によれる自己啓示を示す教義を見ることに、一點の疑念をも挿む餘地なきことを知る。同一の眞理の御靈は、到る處に明かに認めらる。

これはもとより大題目なれば、本篇に於て詳論し得ざれども、五十五年間「批評的」見地より、聖書を読み來れる者（譯者曰ふゴア監督自身）經驗は、其興味は大に増進せられ、其靈的價値は決て減少せざることを證明し得る。聖書は尙依

然として、尊き、「我らの日用の糧」たることは、決して聖奠のそれに劣ることはない。されば、リタニーに於て、聖職は聖書の傳ふる神の御言を「眞に悟り」民衆も亦これを輕んずることなく、よく耳を開きて謙りてこれを聽くこと即ち「これを讀み、懇ろに學び、かつ味ひて、靈魂の營養と爲す」やう祈ることは、今日にても、我らの恭しく祈る祈であらねばならぬ。

加之、何事よりも先づ「神の言を示す」ことを職務とするも聖職たる我らは、其生活を之に「協はす」ときのみ、有功に然かなし得るとの警告を常に念頭におかねばならぬ。われらが傳ふる所は眞實のメッセージである限り、誰よりも先にこれによりて審かるるものは我ら自身なることを念頭におかずしては、説教をなすべきでない。

二、改正祈禱書に於て「共同祈禱」増補の、行はれざる前には、福音による世界教化——即ち通常「傳道事業」と稱せらるゝ所のもの——に言及せらるゝ所、極めて僅少であつた。かく其言及する所の僅少ありしは、畢竟、英國教會の心的背景を反映せるものに過ぎなかつた。聖ポニフェスの殉教後、約一千年間、英國教

會(*ecclesia Anglicana*)は、其國民的特質と利害とにのみ没頭し、全世界に福音を宣傳へよとの神の命令を殆んど忘却せる觀があつた。一般基督教國にては、此傳道の熱心に代るべきものは、聖フランシスや、レイモンド、ラル等の抗議ありしにも拘らず、十字軍に於ける軍事的熱心に於て示された。然るにこれすら回教徒が日々の脅威にてありし諸國ほど、英國を動かすことはなかつた。後、新世界(米國)の征服と、商業的企劃の開始を見るに至りても、尙すべての人類は靈的に同等なること、全人類に及さるべき福音並に世界大の普公教會の意義は、殆んど人々に諒解せらるゝことはなかつた。

註。或程度までの言表は「萬民の爲の所」と、受苦日の特禱に示さる。

これが復興に就ては「福音的運動」^{エバンゼリカル・ムーブメント}に負ふ所、多大にして、今日も尙主として其支持を受けて居る。此點よりせば、改正祈禱書に於て、リタニーと「全公會の爲の祈」並に「臨時祈禱」中に、福音を全世界に傳ふることに關する句節を挿入せることは、誠に多とすべきである。更に教會内に傳道に關する大精神勃興し、各員これに参加するやう奨励せらるゝに至りしは、慶賀すべきである。

三、改正祈禱書には、教會一致に關する鮮新なる熱心の示さるゝに係らず、リク
ニ―に何ら其影響を見ざるは、奇とすべきである。

五

我國と他諸國の爲の歎願

譯者いふ。故ゴア監督は此に英國祈禱書による皇帝ジョージ陛下並に皇后メーリ
―陛下及び皇太子殿下と皇室の爲め四の嘆願をかゝぐ。これらは日本聖公會祈禱書の
天皇、皇后、皇太子、並に皇室の爲の嘆願に相當するものなれども此に譯出を略す。
次でいのである爲政者並に司法官の爲の代禱は我祈禱書の「嘆願」と略同じ。

願くは大臣および有司に才能智識をあたへたまはんことを。

主よ、聽きたまへ。

願くは裁判官を導き裁判を公平にし、正義をまもる恩恵をあたへ給はんことを
主よ、聽きたまへ

(註)此に海陸空軍の爲の代禱を挿む

願くは主の民を祝し、之を護り給はんことを。

主よ、聴きたまへ。

願くは萬國に和睦と太平とを與へ給はんことを

主よ、聴きたまへ。

註一。諸監督よりも先きに、皇帝の爲に祈ることは、英國に於ては珍らしからざるも、これは普公慣例と稱せらる所のものに反す。皇帝と皇族の爲の祈の大半は、クラムマーのリタニーにて増大せられ、第一の祈願も、千六百六十一年に擴大せられた。
註二。セーラム、リタニーには、主の尊き血にて贖ひ、ひしすべての信徒を守りたまはんことをとの祈願があつた。これは全公會の爲の願である。クラムマー本にありては、これは英國民の爲の祈願となり、其後に萬國民の間に平和の保たれんことを祈る願が來て居る。

一、これらの歎願に於ては、特に註解を加ふべきものなきも、唯一つの言ふべきことがある。

祈禱書(英國祈禱書)を全體として見るときは、皇帝の爲の祈禱の夥多なること

其用語の豊麗なることが、他の禮拜式文中にありて、特に顯著なることである。

これは恐らく十六世紀並に十七世紀の英人の氣質によく適合したかも知れない。

然るにハノーバ朝以後は、官僚臭味を帯ぶるに至れることは争はれない。凡そ公禱は、リタニーの大部分及び祈禱書一般がよく示すが如くに、これに参加する者の同情同感を喚起することを目指すべきである。先年皇帝エドワード七世が、病篤かりし際、カンタベリーの大監督は、「病者訪問式」中、危篤なる者の爲に用ふる祈を使用することを公宣せしとき、國民一般の同情を喚起せしことは、尙人の記憶に新なるところである。然るに「國定祈禱」^{ナショナル・プリヤ}と稱するものは此事を爲し得ない。これは國民は敢て忠君の精神に缺け居るといふ爲でない。寧ろ其用語が如何にも浮華にして、誇張せられて居るからである。

此缺陷は改正祈禱書に於て、替用祈禱を制定することにより、又隨意省除を認許することによりて補はれて居る。

然るにリタニーに就ていへば、若し改正委員にして、古リタニーに見るが如くに皇帝と皇室の爲に、一の祈禱を用ふることにて満足したらんには、一層眞實な

る祈禱が行はれたらんと考へらる。過多は情熱を消す恐がある。

それは兎に角、現リタニーに於て、征服し得るやう祈る皇帝の「敵」とは、他の國民といふよりも、寧ろ我らを頽廢に陥んとするあらゆる惡徳と、階級的利己主義であることを念頭におくべきである。

二、恐らく今日ほど、此歎願の中、最後のものを必要とすることを、深くかつ廣く感ぜられて居ることはあるまい。人間歴史上、戦争が國土を荒廢に歸せしとき預言者らは、神の統治の下に、戦争またあらず、人々「その劍をうちかへて鋤となし、その鎗をうちかへて鎌となし」、「國は國にむかひて、劍をあげず、戰鬪のことを再びまなばざる」時の來ることを豫見した。聖アウガスチンは、世界諸國民にして、基督教を承認せんが、戦争は自然消滅となるべきを自明のこととして居る。文藝復興期には、戦争を終止せしめんとして種々工夫を凝らせるものも尠くなかつた。然るにこれらの畫策は皆水泡に歸した。輓近に至るまでは、戦争に代るべきものが發見せられ、其採用を見るにあらざる限り、文化は壞滅すべしとの念は、人心に深く刻まるることはなかつた。「國際聯盟」は實に此一船的恐怖の

所産である。これは尙薄弱なる機關たるを免がれない。されど其出現は一大進出なりといはねばならぬ。全人類の爲の祈禱は、此平和の理想實現を目標とするものに勝るものは、他にあるまい。

人々一般に神に立ち還らんが爲の歎願

- 一、願くは我らに主を愛し、主を畏れ、懇ろに主の誠命に遵ふ心を與へ給はんことを。主よ。聽きたまへ。
- 二、願くは主の凡ての民に益々恩恵を加へ、肅みて御言を聽き、眞心にて之を守り、聖靈の果を結ばしめたまはんことを。主よ。聽きたまへ。
- 三、願くは凡て迷へる人、また欺かれたる人を眞の道に導き給はんことを。主よ。聽きたまへ。
- 四、願くは立てる者を強め、心弱き者を扶れ仆れたる者を起し、終にサタンを我らの足の下に打伏せ給はんことを。主よ。聽きたまへ。

(74)

註一。これらの極めて優れたる、かつ人に感動を與ふる歎願は(初のものを除く外)ルートのリタニーより出で來れるものである。されど「ますく」恩恵を加へ」は、クラムマーの作句。

註二。ガラテヤ書第五章二十二節の「御靈の結ぶ果」は單數「the fruit」なるに、これを複數「the fruits」と過り引用するは、英語リタニーに此「聖靈の果」は複數とせられあるに起因して居る。聖徒パウロが「聖靈の結ぶ果」(the fruit)を單數とし、「肉の行爲」(the works)を複數として對照して居るには、理由なしとしない。「肉の行爲」は、多種多數にして一貫し居らざるも、「御靈の結ぶ果」は、種々の關係に於て、終始一貫せる性格なるによる。

(75)

一、個人にもせよ、國民にもせよ、神に立戻ることとは、常に人間の愛が、神の愛に應答することなるのみならず、神の聖に對する畏敬の一運動である。聖徒ヨハネはいふ、「全き愛は懼を除く」と。誠に然り。畏敬に根據せざる愛は、薄弱なる感傷に過ぎずして、何ら現實に呼應することはない。誰か我らの主の「友」と仰せたまふ所を讀んで、恐怖を無用視し得ると考へ得るぞ(ルカ十二ノ四、五)。

我らの主すら「その恭敬によりて聽かれ給へり」とある（ヘブル五ノ七）。凡そ世に造られたる者が、造主と審判者の前に、臆面もなく、耻辱も知らずに、不遜傲岸を示すほど、非合理的にして、かつ人をして啞然たらしむる光景は他にない。

「われは烈しき怒をおこしたり

これ汝の法をすつる悪者のゆゑによりてなり」

二、此に神の民が神の御言を充分鑑賞し得るやうに、「ます／＼恩恵を加へられんことを」祈る。此の恩恵とは何か。かく翻譯せられて居る原語のギリシヤ語は、何事によらず、凡そ美はしき、「優雅なる」事物、資質、若くは行動と、これによりて生ずる反應的の感恩感謝の念を意味した。

舊約聖書にありては、此語は特に上長者が下級者に對する寵愛若くは好意を意味した。從て神の人に對する寵愛若くは好意を意味した。

新約聖書にありては、此語は（特に聖徒パウロの愛用せるものなるが）、イエス

キリストによりて表示せられたるが如く、ユダヤ人たると、異邦人たるとを問はず、其間の障壁を撤廢せる神の普般的好意を表示する語となつた。——「凡ての人に救を得さする神の恩恵」〔テスト二ノ十一〕は、イエス、キリストによりて來れる「恩恵」である。

然るに教會歴史上、特に拉典語の翻譯にありては、恩恵（*gratia* と譯せらる）は稍新意義を取るに至つた。即ちこれは超自然的の能力——（殆んど聖靈の作動と區別せられて居ない）にして、新生活を送り得せしむる爲の教會の特殊の資能を意味することとなつた。從てバプテスマの特殊の恩恵、信徒按手の恩恵、聖餐の恩恵などと稱するに至つた。又謙虛の恩恵、忍耐の恩恵などといふことをも耳にするに至つた。

右の結果、恰かも外より與へらるるが如き聖餐による恩賜（これはいつも其自體豊富なるが）と、これらの聖餐によれ恩賜の價値を多くもし、寡くもする個々のクリスチアンの感受力とを區別することとなつた。從て或場合には、聖餐によりて與へらるる靈の糧を受くるに不適當なることは、これによりて自身の罰を飲み

食ひすることとなり、又「我らの主イエス、キリストの恩恵を好色に易へ」(ユダ百四)ることすら可能なるほどとなつた。

されば、リタニーの此部分に於けるが如く、我らが「ますく」恩恵を加へたまはんことを「いのるとき、我らの念頭に存することは何ら神の恩賜の増加にあらずして、(これは不可能である)、我方に於ける感受力の増加にあることは、明白である。

加之、神の恩恵は聖餐に於けると同様に、又神の御言に於ても見出さる。然も此にも亦御言の價値は、これを甘受する個々の者の心掛如何による。さればクマムマーのリタニーは、「ますく」恩恵を加へ、肅みて、御言を聴く」やう祈る。即ち御言に對する感受力の増加をいのるのである。

聖書によりて我らに與へられたる神の御言(リタニーにいふ所は即ちこれ)自體に就ては、既にいふ所あつた。然るに御言を感受する點に於て——よろこんで受認する點に於て——甲乙甚しき相違の存することを留意することは、無益であるまい。

勿論、神への信仰と、其自啓とを以て、迷信なりとし、これらを自己の自由發展の障害なりとする者にありては、聖書に對して、何らの感興をも覺へざるは、怪むに足らぬ。況んや、聖書を以て、自己の伴侶、自己の嚮導者——「我が足の燈火、我が途の光明」——とせんとするに於てをや。

さりながら信仰あるクリスチャンの間に於てすら、聖書愛重の精神に、莫大の懸隔がある。然るにも拘らず、靈的進歩に關する確實なる試金石は、「肅みて御言を聴く」ことに於ける進歩如何に勝るものは他にない。

然らば人々をして、此聖書を愛讀せしむることを妨ぐるものは何か。

(一)聖書は難解の書なりといふことは其一因である。

これに對する答は極めて簡單である。苟も普通の學力あるものならば、聖書の諸書を諒解するに困難を覺えない。若し熟考して、又祈りてのち、尙諒解し難き句節あるときは、これにしるしを付けて、放置せよ。研究の進むに従ひ此しるしを附けたる句節は、次第に其數を減ずるに相違ない。さりながら研究の當初にて、しるしを付ける部分は、聖書の内容全體の四分之一に出ることはないであら

う。勿論、聖書を諒解するには、近代の註釋書等は夥多あれども、聖書の肝要部分を諒解するには、我らの良心にて、事足る。

(二)されど恐らく人々の聖書愛讀を妨ぐるものは、他の種類の「困難」であらう。

彼等は今尙、聖書に記載せらるゝ事項は、皆同一の水平とくにあり、同様に眞實にかつ同様に價値あるものなりとの過れる觀念に軛せられて居る。

此過れる假定は、いつにても絶えず排除せねばならぬ。サマリアの呂民が我らの主を歓迎することを拒絶せしに憤激したヤコブとヨハネとが、エリヤが天より火を呼び下して、民衆を焼き盡せし古事を引きしとき、イエスは兩人を叱責したまふた。「汝らはおのが心の如何なるを知らぬなり。人の子は人の生命を亡さんとあらで、之を救はんとて來れり」(ルカ九ノ五四)。行爲にもせよ、願望にもせよ舊約聖書に見ゆる野蠻性にして、我らの主の叱責を蒙らざるもの果て幾何かあるべき。何人にも聖書の研究を始め、これを愛讀する風を養はんとするには、恐らく福音書より出立して、使徒書と使徒行傳へと進み、然る後に、舊約聖書に移

るに勝ることはないであらう。然らば眞によくこれを鑑賞し得るに至るであらう——。即ち如何にイスラヘルの人民が、其無類の執着性の故に選ばれ、其半野蠻的狀態より採用せられて後、其良心がエレミヤや、第二イザヤの言を受認し得るまでに教養せられ、其祈禱の精神は、詩篇に見るが如きに——(此にすらイスラヘルの敵、若くは詩篇作者個人としての敵に對する詛を排せねばならぬとするも)——至れる徑路を諒解し得るであらう。

(三)然るに他の障礙——聖書、特に新約聖書を愛讀するに當り、最も壓倒的の障礙がある。それは疑もなく、人々をして聖書よりも、寧ろ薄弱なる修養書を繙くに至らしむる障礙である。即ち聖書がこれを読む者に迫る絶大なる要求である。

福音書に於ては、確にイエスは無制限の責任を負ふべき奉仕をわれらに要求したまふ。福音書に於ては、使徒書に於ても同様なるが、人若し弟子の仲間入を欲するとせば、生きんが爲に死なねばならぬことは確である。かりにこれは嚴密の意味に於て、禁欲的ならずとせば、確かに壯烈なりと直感するを禁じ得ない。もとより此には譬を用ひてする我らの主の教養法に伴ふ特殊の難點に關し詳論し得ざ

るも根本的の困難は、弟子と自稱するものに對して爲さるゝ要求の絶對性である。然るに前述の如く、靈的進歩の試金石は、神の御言に對する純眞なる愛情に勝れるもの他になしとの意味は、正さに左の如くである。

神は神にいます限り、我らに對する要求は絶對であらねばならぬ。而て全然神に信賴することは、我らにとりては最も賢明なることである。此事を信すれば信するほど、而て我らの生活に之を實現すれば、するだけ、聖書に見る神の御言、特にイエス、キリストの御口より出されたる御言に對する愛情は益々純眞なるものとなるであらう。

(82)

三、第三の歎願は、クラムマーの作句に従へば、基督教外の異教者若くは他の者といふよりも寧ろ教會内に在る者にして、迷ひ出で、若くは他の事に心奪はれ、又は他に欺かれたる者に言及して居る。

クラムマー時代には、此種のもの多敷あつた。今日にても、其數は驚くべきほど夥しい。此種の人々を審判し、若くは非議するは、幸に我らの役目でない。

されど彼らをして、此所に至らしめしものは、かれやこれや、大部分は教會の過失、無爲、怠慢なりしことを記憶して、彼らの復歸を祈ることは、極めて重要である。彼らを復歸せしむるものは、議論にあらずして、實に教會が、其大小を論せず、改善せられて、よく地の鹽となり、世の光となり、山の上の城となることである。いづれにも我らは個人として、眞の信仰の庫より抽出する力と愛と不撓不屈の望とを我らの生涯に示すことによりて、最もよく神に奉仕し、又同胞を助け得る。

四、新約聖書に見る祈は、其大部分は、教會外の者、若くは故意に罪を犯す者らの爲にあらざることは、注意すべきである。人を改宗せしむる感化力は、基督教團體の引着力である。此にも亦これは其教義若くは其論議にあらずして、其生命である。

(83)

此點よりせば、第四の歎願の順序は教訓的である。恐らくこれ以上によく道德的進歩若くは退歩に對する靈的洞察を以て、作句せられたる代禱は、他に見ることとは難いであらう。

すべての受難者の爲の歎願

- 一、願くば危き者を扶け、貧き者を救ひ、災禍の衷にある者を慰め給はんことを
主よ。聽きたまへ。
- 二、願くば海陸(若くは空の)旅人、産婦、病人、幼兒を護り、また獄舎に在る者と
捕虜を憐みたまはんことを。
主よ。聽きたまへ。
- 三、願くば孤兒、寡婦、寄邊なき人、虐げらるる人を護り、之を養ひ給はんことを
主よ。聽きたまへ。
- 四、願くば凡ての人を憐みたまはんことを。
主よ。聽きたまへ。
- 五、願くば我らを憎み、又は誹り、又は悩ます者を赦して、その心を改めさせた

まはんことを。

主よ。聽きたまへ。

(註)以上の嘆願も亦ルーテルのリタニー並に一部分は聖クリソストムのピザンチウム・リ
タニーに従へるものである。

聖バジルのリタニーには、我らの主に左の如く祈がさゝげられて居る。

「主よ、願くば航海するものとともに航海し、旅するものとともに旅し、寡婦を助け、
孤兒を護り、捕虜を救ひ出し、病める者を癒し、凡て曠山に在る者、流竄の地に在るも
の……又は悩める者、乏き者を御心に留めたまはんことを。主は人各を知り、又其懇願
をも知りたまへば、願くば萬人の爲に萬事となりたまはんことを。」

セーラム・リタニーには「願くば貧き者の憐れみをみそなはして助けたまはんことを」とある。
聖クリストムのリタニーにも、亦我らの敵の爲の祈がある。「願くば主の御名の故に我ら
を憎み我らを迫害する者の心を改め、我らに對する怒を和げしめ結はんことを」。

かくの如き嘆願(たとへば「五」の如き)の他の嘆願に伴ふは、畢竟、人間の難苦の大
部分は、同胞の不注意並に心の無情に因るものなるが、仇を愛し、辱め責むる者の爲に
祈るは、クリスチャンの義務にして、又特權である。

一、これらの嘆願は、おのづからつよく我らすべての心に訴へる。今日の世界に

は難苦と不幸とが満ちて居る。支那、ロシア、印度を想ひ、各國に於ける失業者
迫害を受くる少數派、弱者に對する强者の輕蔑、到る處に見る病人と窮迫者を想
へば、此事は明である。されば苟も祈るほどの者は、貧き者と惱める者との爲に
祈るに決て吝であつてはならぬ。加之、我らは常に我らの救主の憐憫の御姿を念
頭におかねばならぬ。「群衆を見て、その牧ふ者なき羊のごとく悩み、且つたふる
るを甚く憫みたまふ」(マタイ九・三六)

さりながら我らの救主の憐憫は、決て一片の感情ではなかつた。それは行動に
到らしめし感情であつた。神はかれにより、慈悲と憐憫とを示すことに於て、
主として其全能の權能をあらはしたまふた。かれは病める者を癒したまふた。か
れは惡鬼を追ひ出したまふた。かれは「縛められたる者を解き放ち」たまふた。
從來哲學者が哲學的の沈着と兩立せざる心を亂す感情を暴露するとせし憐憫の
權能を、世に初めて示したのは、我らの救主であつた。若し我らの憐憫にして、
唯一片の感情に止り、何ら救治的の行動を伴はざるとき、キリストらしき憐憫を
去ること遠しといはねばならぬ。

されば我らは惱める者、若くは乏き者の爲に祈るとき、如何にして彼らを助け
得べきかを想ふことなしに決て祈るべきでない。惱める者を見ながら、これを實
地に助けんと心を起さざる者に對するキリストの審判は極めて殿しい。「誣はれた
る者よ、我を離れよ……なんぢら爲さざればなり」。歴史は一個人にても、人類の
重荷を除き去ることに、多大の貢獻を爲し得ることを示す。最近逝世せし二人の
婦人の如きも、其例である。コンスタンス、スミスは工場に於ける勞働婦人の爲
に、又マーガレット・マツクミランが、病弱の學校兒童の爲に、如何に莫大にし
て、かつ永久的の事業を爲したるよ。兩者とも廣範圍に亘れる永久的の救濟が、
一個人の生涯によりて達成せらるかを示した。これに反して英國教會が人類の難
苦に直面しながら、幾世紀間も徒らに傍觀せしに過ぎざること願るとき、かり
に冷淡にあらざりしとするも、難苦の因りて出で來る不正と殘酷の本陣を攻落す
ることなしに、徒らに姑息なる一時的救濟策を取るに過ぎざりしを想ふとき、我
らは慚愧の念を禁じ得ない。

最上の心掛のあるものにて、我らは尙キリストの審判の御言―『此等のいと

小きもの一人に爲さざりしは』——を讀み若くは聽くとき戰慄せねばならぬ。我らは境遇上、艱める者を助け、若くは慰め、或は縛められたるものを解き放つに當り、唯僅少のことを爲し（恐らく何事も爲し得ずと言はず）得るに過ぎざるやうに思はる。而かも尙我らの従事する仕事、若くは我らの使命の存する處に、多少にても慈善事業の爲に盡す餘裕あるとき、而てこれを爲すに當り、假令これが經營の衝に當るものを後援するの外なしとするも、我らの寄附行爲は、單にアツピールに對する感情的の應答に止らずして、我らの寄附する協會若くは經營者に關して信用するに足る智識に根據せるものでなければならぬ。「幸福なる哉、貧く乏き者を顧るものは」とは、我らの心に諮るとともに、又我らの頭腦に諮ることを意味すと解釋せられないことはない。世には處置宜きを得ざるが爲に、益よりも却て害を生せしむる「慈善」の類尠くはない。若し其動機にして徒に神の前に功績を積み若くは世の譽を得んとするにあらば、これは全然慈善でない。世には此類も夥しい。

神が貧き者、惱める者を如何に深く御心にとめたまふかは、預言者の教により

て、深刻にイスラエルの心に印せられて居た。このことは詩篇百四十六篇の末節を見ても明である。

ヤコブの神をおのが助とするものはさいはいなり。

その望をおのが神、主におくものはさいはいなり。

神はとこしへに眞實をまもりたまふ。

虐へらるるものの爲に審判をおこなひ、

飢へたるものに食物を與へたまふ。

主は虜はれたる人を解き放ちたまふ。

主はめしひの目をひらきたまふ。

主は屈む者を直く立たせたまふ。

主は孤子と寡婦とをささへたまふ。

されど惡き者の徑はくつがへし給ふなり。

以上は舊約のメッセージなるが、これは新約に於ても保持せられ、やがて他日完全に實現せらるる所のものである。

二、宗教改革當時の宗教文學には、プロテスタントに對するキャソリックの中傷プロテスタントのキャソリックに對する中傷が到處に散見する。今日にても、政治界、文筆界並に宗教界にも、等しくこのことを見る。我らは中傷を忍ぶことを覺悟せねばならぬ。

我らの主が審判廷に立ちたまひし時、證人等は、「此の人は「われは手にて造りたる此宮を毀ち、手にて造らぬ他の宮を三日目にて建つべし」と云ひし」とて、我らの主を責誅せしとき、彼らは偽證を爲し居たのである。されど我らの主は略これと類似のことを仰せたまふた。「此宮を毀て、我三日にてこれを建つべし」——即ち「汝ら實際我を排斥することによりて爲しつゝあるが如く、若し此宮を毀たば、我は三日にてこれが靈的の對應物を建てん」との意である。然るにイエスは其意味したまひし所を説明したまはなかつた。「黙して何をも答へ給はず」

當時、然かしたまふは、最も賢明のことであつたに相違ない。されどこれには最大限の自制が含まれて居る。見當はづれの中傷は忍ぶに難くはない。眞實らしく思はるる中傷は我らをして憤慨せしむ。然かも我らはこれを忍ばねばならぬ。

されど中傷せらるるとき、これを釋明すべきか、將又、沈黙を守るべきか、いづれにもせよ、これに對する正當の應答は、此歎願に見ゆるが如く、惱ます者を赦して、その心を改めしむるやういのである。

中傷者は舊約聖書の智慧文學に常に見る人物である。左に其一例を掲ぐ。

「薪なければ火は消え、人の是非をいふ者なければ、争端はやむ。人の是非をいふものの言は、たはぶれのごとしといへども、かへつて腹の奥に入る」。(箴言二六ノ二〇、二二)

結末の歎願と短禱

一、願くは地の産物を榮えしめ、之を護りて我らの用に充てたまはんことを
主よ。聽きたまへ。

二、願くは眞に悔ゆる心を與へ、我らの罪と怠慢と過失とをことごとく救し、ま
た御言に従ひて行爲を改むる爲に聖靈の恵を與へたまはんことを。

主よ。聽きたまへ。

神の子よ。我らの祈を聽きたまはんことを冀ひたてまつる。

神の子よ。我らの祈を聽きたまはんことを冀ひたてまつる。

世の罪を除きたまふ神の仔羊よ

主の平安を我らに與へたまへ

世の罪を除きたまふ神の仔羊よ

我らを憐みたまへ

キリストよ。我らの祈を聽きたまへ。

キリストよ。我らの祈を聽きたまへ。

主よ。憐みたまへ

主よ。憐みたまへ

(註)此二の結末の歎願の初めものは、我らの物質的要求の供給せられんことをいのり、
後のものは、我らの靈的要求の供給せられんことをいのる。兩者とも措辭完備して居る。

第一のものは、セーラム、リタニーより來り、第二のものは、クラムマー、リタニーよ
りである。

これに次で、「神の子よ、我らの祈を聽きたまはんことを冀ひたてまつる」とある。これ
は既述の如く、セーラム、リタニーの冒頭にあるものを其要領に於て此に反覆したもの
である。

「神の仔羊よ」も亦セーラム、リタニーより來る。但しセーラムには三度反覆せられて
居る。

「キリストよ。我らの祈を聽きたまへ」は、古の拉典リタニーの或ものより來て居る。

次の「主よ。憐みたまへ」と、主禱とは、セーラム、リタニーよりである。此にては勿論もはや我らの主に訴へず、先づ聖三位に訴へ、後に御父に訴へて居る。(註二)。既述の如く、聖徒パウロの「御霊の結ぶ果」(單數)が、複數となり居るが如く此にも亦聖徒ヨハネの「世の罪」(單數)(ヨハネ一ノ二九)は複數となつて居る。(さきながら聖徒ヨハネは其第一書三ノ五には、複數を用ひて居る。「罪」を單數にて記すときは世界を一大連帶的統一體と見做し罪の羈絆の下にあることを示す。複數の場合は、個々の人々の罪の多種多様なることを示す。我らの主の救贖的行動は、人類を全體として見るとともに、又個人の集合と見做して居る。

一、物質的要求の供給せられんことを祈る歎願は甚しく其意義を變化した。クラムマーが初め此歎願を起草したときは、各教會にて、これを祈りし人々は、主として、安價なる食糧を得んが爲に、地方的豊作を祈たのである。然るに今日にては地方の産物は殆んど數ふるに足らざるに至た。これを祈るは實に世界の産物と世界の物價である。産物は豊饒にても物價は依然として高きことあり、甚きは人民は飢餓に迫ることなしとも限らない。これは物價の騰貴するまで、産物を市場に出さぬ爲である。かくて此歎願の意義は複雑となり來りしも、此歎願の必要は

依然として同様である。若し穀物豊富なるに人民が飢餓に迫るが如きことありとせば、それは現時の國際的處置の痛心すべき落度である。

二、我らの靈的要求を供給せられんことを祈る歎願は、赦免に重點を措かねばならぬ。而て我らの積極的のあらゆる罪と怠慢のみならず我らの無智に對する赦免を祈るべきことを我らに教ゆ。眞の不可抗的の無智も亦、其自悔赦免を祈り求めねばならぬことである。「父よ彼らを赦したまへ、其爲す所を知らざればなり」とは、初は單に無慈悲なる責務を執行しつゝありしに過ぎざる無智の兵卒に對する祈なりと覺ゆ。然るに聖徒ペテロと聖徒パウロはともに、無智の爲の歎願の範圍を擴大して居る——聖徒ペテロは(使徒二、十七)「悔改」めんことを彼が心に願ひしエルサレムの人民全體に又聖徒パウロは(コリント前二八)「世の司」(複數)に擴大して居る。然るに無智も故意の場合、若くは怠慢の結果なるとき、罪責を免かれざることとなる。有名無實なるクリスチアンの宗教的無智、教養ある人々のそれは、世に報道を得る手段の夥多なる限り、變奇なものといはねばならぬ。

實際、我らは我らの無智を悔改めねばならぬ。かつ過去に對する如何なる赦罪も「我らの生活を改善する」確固たる目的を以てこれに呼應せざる限り可能でないことを忘れてはならぬ。「無慈悲なる僕」の譬に於て、「署名捺印の上、授與せられたる」安當の赦罪も、これを受くる者の心の動向の變化に伴はざるが爲に、全然無効となつた。「汝、わが心をひろくしたまはん。さらば我なんちの戒の道をはしるべし」。

三、特殊の惠福をいのる歎願の叙列は随分長かつた。従て倦み易い。然るに歎願の結末に於て、何ら特殊の要求をいひあらはさざる短簡急迫にして、反覆せる訴は、慈悲ふかき贖主にさづけられて居る。これは正當の方法である。詳細なる歎願に倦みたる時、我らは宜しく間投的にして、幾度も反覆せる叫にて、我らの精神を慈悲ふかき神に集中すべきである。我らの主は祈に於ては、不屈不撓なるべきことを極言したまふた(ルカ十八ノ一一八)。幾度失望しても消失することなき信仰とは、正にかくの如きものである。何日か神はわれらの祈に應へたまふであらう。御國は來るであらう。されど我らの主はこれが爲に、信仰の忍耐の容易なら

ざることを認め、「人の子來るとき、地上に信を見んや」と愁然として仰せたまふた。翼くは主、我らのうちにこれを見たまはんことを。

四、若しそれバプテスマのヨハネが「神の仔羔」に附せし意義(ヨハネ一二九、三六)、及び第四福音書の記者の附せし意義等に至りては、其句節に關する註釋書を参照し得るも、教會が恭しく此句を用ふるに當り、舊約聖書に見ゆる三の事は其念頭にありしに相違ない。

(一)はイサクに對するアブラハムの答である。「神、みづから燔祭の羔を備へたまはん」(創二二八)。其意味することは、大なる宥は全然、神の設備したまふ所にし、我らは何らこれに寄與することなきこと。

(二)イザヤ書第五十三章に見ゆる忍従の受難者の姿である。「屠場にひかるる羊羔のごとく、毛をきる者のまへにもだす羊のごとく其口を開かざりき」。

(三)イスラエルの爲に、贖の犠牲たるべき過越の仔羔である。

黙示録にも、天にて神の御座の中央に立つ「曾て殺されたることある仔羔」の

異象もあつた(黙五六)。

以上の諸句節は、此句に對して、豊富なる背景を提供する。「負ふ」との現在動詞が、第四福音書より引用せられて、其儘保存せられれることは喜ぶべきである勿論救贖の大業は特異の行動——十字架の上に贖主が其血を流したまひしことに基き、かつ集中せられて居る。されど其過程と効果は世の終まで続く。かつ大衆の場合には死の彼方にまで及ぶことは確實である。「汝らの衷に善き業を始めたまひし者の、キリスト、イエスの日まで之を全うしたまはん」。

五、主禱の用ひらるるには、特に好當なる二の場所である。——一は聖餐式の頂點に於て我ら「憚らずして」、キリストは我らの爲に、御父に近づくことを得せしめたまへりと正當に言ひ得る所。二はリタニーの終の如く、長き幾多の懇願の終末に於て、すべてを一に總括する所である。元來、主禱は多くの祈のうちの一の祈といふよりも、「汝らかく祈るべし」——とあるが如く、一切の基督教祈禱の鑄型にして、又要約であることを忘れてはならぬ。

公禱に於て、主禱を唱ふる時、我らが不注意に陥ることを戒ねばならぬ——これは幾分は、祈禱書にあまりに頻繁に主禱が用ひらるるによる。此點に於て、改正祈禱書は控目となりしことは喜ぶべきである。(即ち早禱と晩禱とに各一回、リタニーと聖餐式には全體には各一回となつた)。之を唱ふるに輕忽であつてはならぬ。何故となれば、あらゆる祈の中、これほど思考と熟慮とを必要とするものは、他にないからである。

改正祈禱書に見ゆる主禱の句讀點をよく注意し、「天に於ける如く地にも」の句は、前行の三句に關聯せることを、われらの念頭に明になるやうにせねばならぬこれは教會の傳承である。トレント會議は、牧師たるものは民衆をしてよく此事を諒解せしむべしと警告して居る。而かもこれは亦近代學者の結論である。従てこれは單に不肝要なる句讀點の問題でない。これは祈に於て天の父を呼びたてまつりて後、我らの人間的要求を發表する前に、我らの念頭に眞の生活——恭愛の生活(「願くは御名を聖となさしめたまへ」)、交と秩序の生活(「御國を來らしめたまへ」)、神の御意を喜んで達成する生活(「成らせたまへ」)——を置くべきことを、

我らの心に深く印彫せしむる手段である。禮拜と交と奉仕の眞の生活は、既に存在して居る。これは新きエルサレムの生活、即ち天のシオンにして、我らは此世に在りながら、其市民として既に登録せられて居り、之が榮光をあらはすことは、我らの最上の忠誠である。教會は地上に於ては勿論、不完全なりとはいへ、此天上界を表現するやう設立せられたものである。又教會をして然かあらしむることは、我らの第一念願にして、又第一の祈であらねばならぬ。「天に於ける如く、地にも御名を聖となさしめたまへ。天に於ける如く、地にも、御國を來らしめたまへ。天に於ける如く地にも、御心を行はしめたまへ」。かく天に於けるが如く、神の榮光を人間の要求以上に置き、我らの弱小なる計畫を神の廣大なる目的の中に没入し、我らの頑固なる意志を神の廣大なる意志と協調せしむるとき、其時こそ我らは我らの要求を言ひあらはすことを許さるるなれ。かくて控目に——「我らの必要とする所のものを我らに與へたまへ」でなく、「我らの日用の糧を我らに與へたまへ」といふ。即ち神への奉仕に於て生活し得るやういふ。かつ我らは神と和がざる限り神に奉仕し得ざるが故に、「我らの罪を赦したまへ」といふ。更に

兎に角ではなく、却て神が我らを取扱ひたまふ深遠なる法則に従ひて、我らの同胞を取扱ふやう、「我らに罪を犯すものを我ら赦す如く、我らの罪をも赦したまへ」といふ。最後に我らは弱く、頼りなきが故に、「我らを試に遇はせず、惡より救ひ出したまへ」といふ。げにこれは驚嘆すべき祈である。小兒もこれをよく諒解し得る。されどその豊富なる意義を詮索するは、一生涯の訓練である。我らは我らの靈的能力を傾注してこれを鑑賞せんとつとむるとともに、教會若くは他の場所にてこれを唱ふるとき、我らが如何にこれを鑑賞し居るかを示すやうに唱へたい。

『第二リタニー』

註。日本聖公會祈禱書九〇頁以下参照。

英國改正祈禱書は賢明にもリタニーを、二部に分けて居る。後の部分は主禱より始まり、「リタニーに於ける主禱の後に用ふる懇願にして、昇天前祈禱日、謹慎反省の期節、並に艱難の際に用ふ」とせらる。

此謹慎反省のリタニーは、恐らく戶外昇天前祈禱の原形たりしものを示すものなるべく、聖餐式と關聯して唱へられしリタニーと區別せらる。即ち答唱アンチフォーンの中に含まれたる詩篇（若くは詩篇の斷片）と、唱和と祈とに前後せられて居る。

註一。「主キリストよ、聽きたまへ」まで全部は、セラムより來て居る——第一詩は「艱難時代」のミサより、殘餘は昇天前祈禱日の祈禱と戰時祈禱より來て居る。（ヘンリー八世は二の戰爭に従軍中なりし故、クラムマーの英語リタニーを必要としたのである）。千

五百四十四年及び千五百四十九年の祈禱書に見ゆる最終の祈は、セラム祈禱書より譯せられたる現用譯文の初の半分より成る。但し諸聖徒の代禱によりて我らが益を受くるやうとの願は除かれて居る。然るに現用譯文の後半は、セラム譯文より出でしものにて、初めクラムマーが挿載せしものなるが、後期祈禱書にては除かれ若くは臨時祈禱の中に入れられて居る。

「クリリストムの祈」は、クラムマーによりて千五百四十四年に挿入せられた。此所謂「クリリストムの祈」なるものは、聖クリリストムと聖バジルの名を冠せられたる聖餐式文に見ゆる祈の翻譯である。

コリント後書第十三章十四節を祝詞として用ふることは、ピサンチウム聖餐式文に見ゆ。これは千六百六十一年に此に挿入せられた。

註二。應答に見ゆる「ダビデの子よ」との呼掛は、拉典文の「活ける神の子」に代れるものにて、恐らく拉典語より拔萃の際、寫字者の誤寫せるものであらう。

一、此「第二リタニー」には、一種の熱意が磅礴して居る。これは艱難に直面し若くは艱難來——幾分か外患を——杞憂することより來て居る。（第一特禱に見ゆる「患難」は拉典語にては、軍事的攻撃と「悪き術策」とに共通に用ひらる。いづれにもせよ、これは危機に直面せる時の爲である。

二、第一の唱和は詩篇百三篇十節より来て居る（三度繰返されたる）答唱は、詩篇第四十四篇の末節を稍變せしものである。此に用ひらるる「詩」も亦同じ詩篇の初句に榮光頌を附せしものである。唱和も、答唱も、詩も、皆舊約聖書特有の懇願である。先づ敬虔なるイスラエルが、其民は當然審判を受けねばならぬと覺悟しながらも、尙これに對して神の慈悲に訴へんとする情を表す。次に神の一見無爲にいますことに抗議す。「主よ、覺めたまへ。いかなれば眠りたまふや」「如何なればみかほをかくしたまふや」「いつまで我をわすれたまふや」「起きたまへ」「汝はわれにおけること水をたもだずして、人を欺く溪河のごとくなるや」（エレミヤ十五ノ十八）。終りに、過去に於ける神の偉大なる救贖の行爲に對し深甚なる感想を表す。

神と其我等に對する處置に關するこれらの心的態度は、宜しく一に融合せらるべきものである。一般に亘れる長き神の傍觀、並に神の意志に對する反抗——歴史に示現せられたる神の大なる救贖行爲を恭しく認識すること——神は何ら爲し

たまふ所なきが如きを見て殆んど絶望に近き魂の苦き叫。此中最後のものは、舊約聖書に於ては極めて豪膽なる態度——殆んど神を瀆すと思はるやうに反覆せられて居る。然るも拘らず、神はこれを聴くことを悦びたまふ。これは十字架の上に、我らの主自身により、詩篇第二十二篇の冒頭の質問の驚くべき形に於て示されて居る。「我神、我神、何ぞ我を見棄てたまひし」。

神を重要視せざる世界に、平然として安堵する魂の爲には、何ら策の施すべきものなく、又此種の魂によりて、爲さるべき何物もない。これらの奇妙なる叫は、畢竟、其動機とする所は、神は過去に於て、大なることを爲したまふた、又其民の爲にこれを爲したまふに相違ないといふことである。更に何故に此種の叫ありやとの説明は、神の不活動若くは一見救済不能に思はるゝが如きは、所詮、神の選びたまひし器の不適當なる由ることである。悔罪と賞嘆と困惑——此に三者は同じ心的状態の三方面にして、俗的精神と正反對の態度である——（俗的精神態度とは）破壊と救済とに於て、神が其御顔をあらはし、其御腕を振ひたまふ人間歴史の驚駭絶倒すべき場合にも、何ら特に意識することなく、又現世界の常道

常則の擾亂を経験することを欲せず、世界の現状のまゝにて、悠々自適せんとするものである。

「歴史（特に教會歴史）は意氣沮喪せる者に對する最上の強壯劑なり」とは、ライトフット監督の言なりと信ぜられて居る。或意味に於て、此事は眞實である。思慮深きイスラエルにとりては、歴史上、熱烈なる愛國心を鼓吹する幾多の重要時機があつた。エジプト若くはバビロン、若くはマカベ時代に於けるギリシヤの統一運動よりの救援の如きはそれである。新イスラエルの歴史に於ても、これと同様のものがある。即ち信徒の心を作興せしむる教會生命の喜ばしき復興である。

(106)

然るに舊約に於ても、新約に於ても、長月に亘りて、神は何ら爲したまふ所なきが如く見ゆることがある。これが唯一充全の説明は、教會の意氣地なきこと、即ち神の提供したまふ所に應答し得ず、又應答することを拒否せることにある。されば今日の如き世界に住むクリスチアンにとりて、正當なる心的態度とは、悔罪と、殆んど苦悶に類するが如き祈と、確固たる信仰の複合せるものである。

る。「千歳の岩」として神を有つものにとりては、其過去の慈愛は、希望の源泉である。然るに我らの主は最後の勝利の示現せらるゝ前に、信仰は深刻なる檢試を経べきことを警告したまふ。「人の子來るとき、地上に信を見んや」

三、「願くは我らの主イエス、キリストの恵、汝らと（或は「汝らの靈」と併に在らんことを」とは、聖徒パウロの諸書簡に見る共通の結辭なるが、コリント後書の終には「神のいつくしみ聖靈の交」と附け加へて居る。此三位の御名配置の順序は神の示啓の順序である。「恩恵はイエス、キリストによりて來れり」即ちイエスキリストによりて、神の活動的の好意は、其あらん限りの深刻性と普遍性とに於て初めて示現せられた。此示啓によりて我らは神（御父）は愛なりと知るに至つた。かくて我らの主が地上より御姿を消したまふてより、終に聖靈の降臨があつた。此聖靈によりて、我らは父と其子イエス、キリストの交際に「與かる」となる教會の交際に入れられるのである（壹ヨハネ一三）。

(107)

リタニー靜想は今や其終結に到達した。此優秀なる祈の形式こそ、我らにして若し相當の注意を拂ふ場合、我らの願望を表白するによく心に殘る言辭を設備するのみならず、祈といふ神事に於ける深遠にして透徹せる訓練を設備するものでなからふか。(完)

同譯者によりて邦譯成れる

故ゴア監督の名著

聖餐論

新神學と舊宗教

キリストへの信仰

昭和九年五月二十五日印刷
昭和九年五月二十八日發行

(定價金四拾錢)

發行者 東京市豊島區池袋三丁目一六一二(稻垣方)
白石庵敬神叢書發行會

右代表者 東京市豊島區池袋三丁目一六一二
稻垣陽一郎

印刷人 東京市豊島區西巢鴨四丁目一二六
澤田文雄

印刷所 東京市豊島區西巢鴨四丁目一二六
學園印刷所

神學博士
稻垣陽一郎著

信仰再建叢書

公會遺紹の信仰を確守するとともに、近代探討の學識に照應して、之を擁護辯證せんとするア
タナシオ會發行の小冊子。

- 第一輯 救主イエスは處女より産れたまひしや
金 參拾錢 (以下同)
- 第二輯 「主は實に甦りたまへり」
金 四拾錢
- 第三輯 「基督教聖蹟は機密教と交渉ありや」
金 參拾錢
- 第四輯 來世の生命
金 四拾錢
- 第五輯 ラムベスめつせいじ
金 五拾錢
- 第六輯 キリストの人格と事蹟の論圖としての聖餐
金 貳拾五錢
- 第七輯 「めぐみ」と「まこと」
金 四拾五錢
- 第八輯 罪(基督教教義と近代思潮)
金 參拾錢

故ゴア監督著 基督教道徳より見たる産兒制限
金 四拾錢
マキム監督手記 宣 教 五 十 年
金 貳拾五錢

發行所 東京市豊島區池袋三丁目一六一二
稻垣方(振替東京四六四三五)
アタナシオ會
取次販賣所 東京麻布區材木町二四
振替東京四一四七〇
聖公會出版社
——聖公會員(男女を問はず)の入會を歓迎す——(アタナシオ會)

ホーレル博士追悼記念出版

著者に親しく薫陶せられ特別知遇を受けし稲垣博士の感激的追悼名譯!

故神學博士 フランシス・ゼ・ホーレル論集 マキム監督序
神學博士 稲垣陽一 郎 編譯

最新刊 聖公會信仰と近代學蹟

四六版・コットン上等紙
布裝美裝・九ボ二百卅頁
著者の小傳と寫眞入
定價 一圓六十錢

現代組織神學の最大家と評せられし「ドグマチック神學」十卷の著者フランシス・ジヨセフ、ホーレル博士逝て、正さに二年半。生前、著者の執筆に係る著述一切の翻譯の特權を許與せられたる譯者は、此に聖公會信仰と近代學蹟に關係ある故博士の論文講演等を集輯翻譯し、故博士が常に關心と同情を有ちたりし日本に於ける記念出版として發行す。

殊に最後の一篇は、特に日本聖公會の爲に執筆せられし肝要の大文字。巻頭、マキム監督の序言と、譯者の筆に成れる故博士の小傳を載す。

要 一 建設的神學。聖書と近代批評。神の觀念。奇蹟。苦難と神意。キヤソリツクの基督目 一 論。崇高なる護教家。教會再一致運動と聖公會。基督教組織の普公性と適應性。

東京市麻布區材木町二四番 聖公會出版社
電話青山七八〇二番 振替東京四一七四〇番

REFLECTIONS ON THE LITANY

by

The Late Bishop Gore.

Translated by the

Rev. Yoichiro Inagaki. S. T. M., D. D

Professor of Dogmatic Theology in

The Central Theological College, Tokyo, Nippon.



Issued by

THE IMAIZUMI FOUNDATION

1934

終

REFLECTIONS ON THE LITANY

by

The Late Bishop Gore.

Translated by the

Rev. Yoichiro Inagaki, S. T. M., D. D.

Professor of Dogmatic Theology in
The Central Theological College, Tokyo, Nippon.



Issued by

THE IMAIZUMI FOUNDATION

1934